

縄文時代の屋内調理と貯蔵穴

— 埋甕炉そして埋甕とCピットの用途 —

中村倉司

はじめに

むかし昔、ある遺跡で特異な炉に出会った。縦方向に半裁した2個体の土器を巧みに配した橢円形の埋甕炉であった。土器は女が作った。炉も女が関わった施設なのであろう。重厚で見事な手の込んだ素晴らしいこの炉は、男が女のために造ったのだろうか。炉を自慢する男とそれを優しく眺める女の姿が目に浮かんできた。埋甕炉に愛着を感じた瞬間であった。

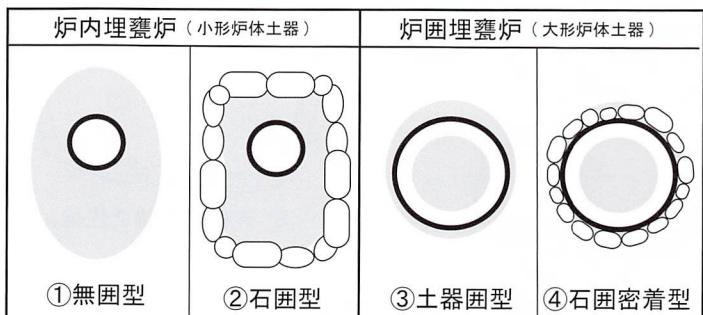
埋甕炉に思いを馳せる過程で、埋甕炉と埋甕には多くの共通点があることに気が付いた。形態的な特徴や出現時期、そしてその展開などである。従来、埋甕炉と埋甕の関連が論じられたことはなかった。何故ならば中期の埋甕は、入口部と目されるの南壁際にあるのに対し、前期のそれは炉に近接つまり住居跡の中ほどに設置されている。そのために時期を越えて埋甕が同一の俎上に載せられて、その関連性が追求されることはなかった。埋甕炉についても研究対象は、中期に限定されていた。

埋甕炉や埋甕が出現した前期初頭には、所謂Cピットも出現している。本稿では、これらの関連とその用途について考える。

1 埋甕炉

(1) 分類 (第1図)

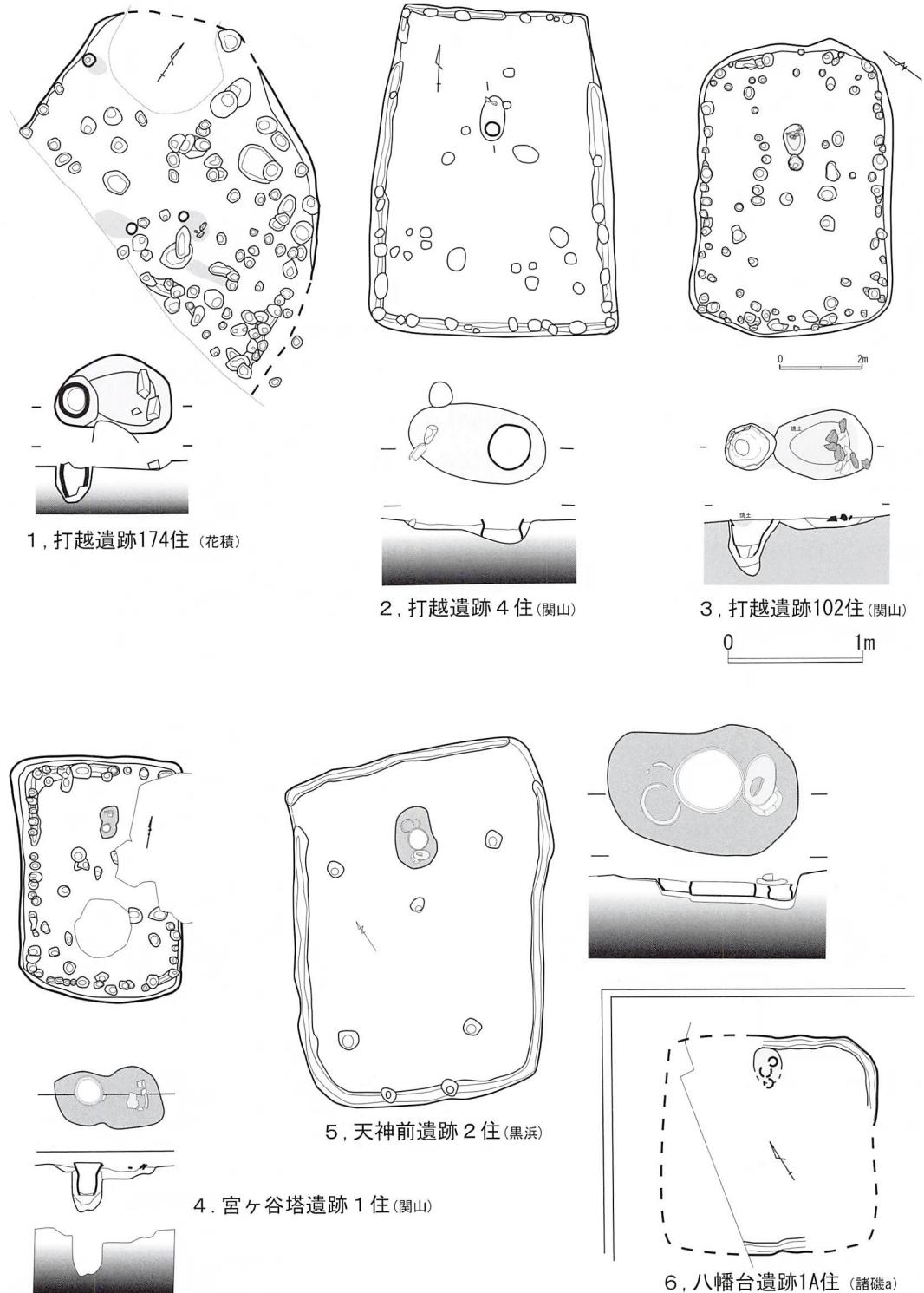
埋甕炉は、主に炉体土器の大きさによって二者に大別される⁽¹⁾ (三上 1995)。一つは小形で炉内に取り込まれている炉内埋甕炉、他方は大形で炉を区画している炉囲埋甕炉⁽²⁾である。炉内埋甕炉は、炉の中央付近(中央型)とその周辺(偏在型)に埋設される二者があるが、前期の炉内埋甕炉は偏在型に限定される。また、炉内埋甕炉の炉体土器は1基を基本とするが、複数埋設されるものもある。他方、炉囲埋甕炉は大形土器をそのまま利用したものと土器片を利用したものがいる。前者を単体円型、後者を土器片橢円型とする。



第1図 炉内埋甕炉と炉囲埋甕炉

(2) 出現と展開

埋甕炉は、花積下層期に小形炉体土器を使用した炉内埋甕炉として出現する(第2図)。富士見市打越遺跡第174号住居跡例が最古の埋甕炉として捉えられるであろう。しかし、該期には打越遺跡第113・136・189住居跡例(荒井1978・83)のように炉と埋甕が近接したものや一部重複しているものがあり、埋甕炉と埋甕の識別が困難でもある。さらにこれらの炉や埋甕がそれぞれ複数存在しており、同時存在なのか否かの判断にも苦慮する。何れにしろ、該期の埋甕は、極めて炉を意識している。



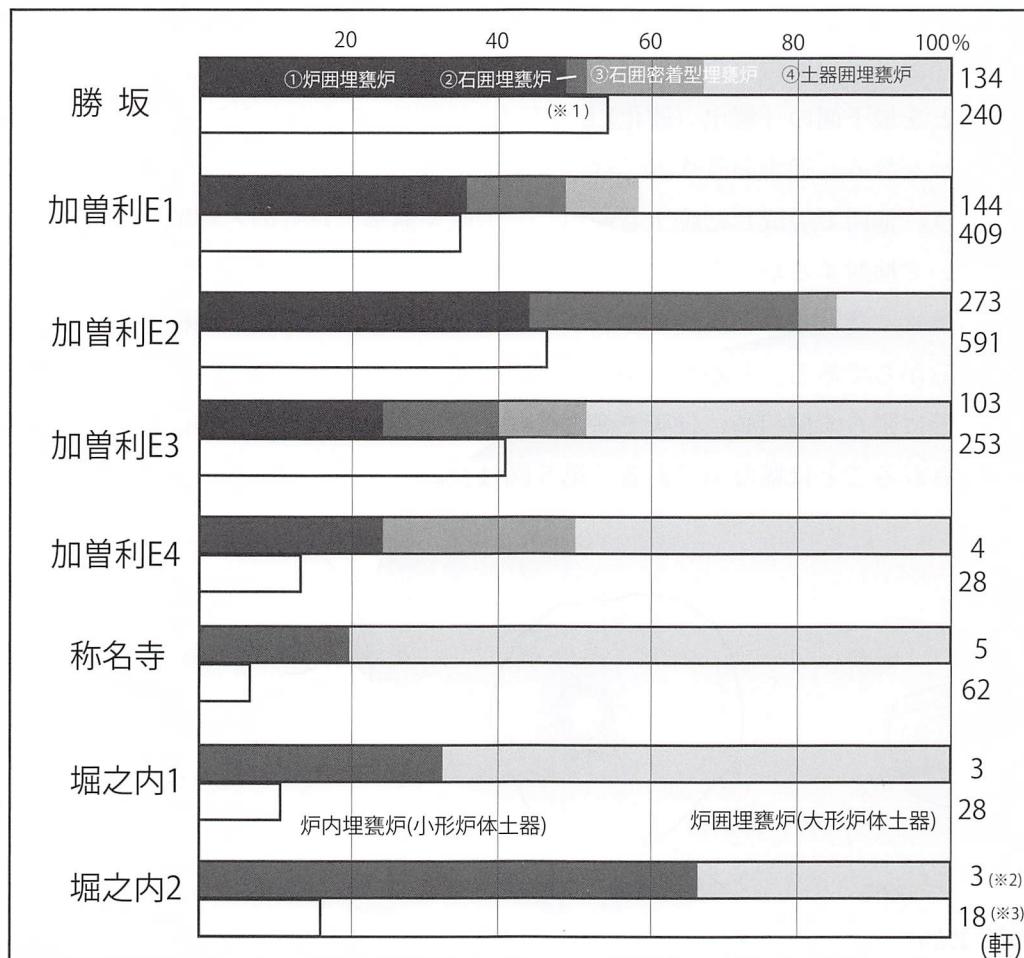
第2図 前期の埋甕炉

関山期には打越遺跡4住のように完成した埋甕炉も存在するが、同102住のように炉に接する埋甕も存在する。偏在型の炉内埋甕炉が主流であるが、深谷市宮西遺跡193住のように中央型も見られる。なお黒坂禎二是炉体土器について関山II期を「境にして完形土器が埋設されなくなる」(黒坂2005)と指摘している。

諸磯a期の小川町八幡台遺跡1A住では、3基の炉体土器が認められる(黒坂1999)。複数埋甕炉は、花積下層期にも存在していた。埋甕炉は、諸磯b期までには確実に存在するが、その後は勝坂

期まで類例に恵まれていない。

中期は、埋甕炉が盛行する。しかし勝坂期は地床炉が主体であり、埋甕炉が盛行するのは加曾利E I期になってからである。勝坂期から加曾利E I期までは、炉内埋甕炉（小形炉体土器）と炉囲埋甕炉（大形埋甕炉）は拮抗した数である。加曾利E II期では前者が8割を占めるが、加曾利E III期から加曾利E IV期には、後者が主体を占めるようになる（第3図）。



* 1 : グラフ下段は、炉体土器を有する住居跡の割合。
 * 2 : 炉体土器を有する住居跡の数。
 * 3 : 対象とした住居跡の総数。
 * 4 : 対象は埼玉県内、遺跡名は省略。

第3図 各種炉の変遷^(※4)

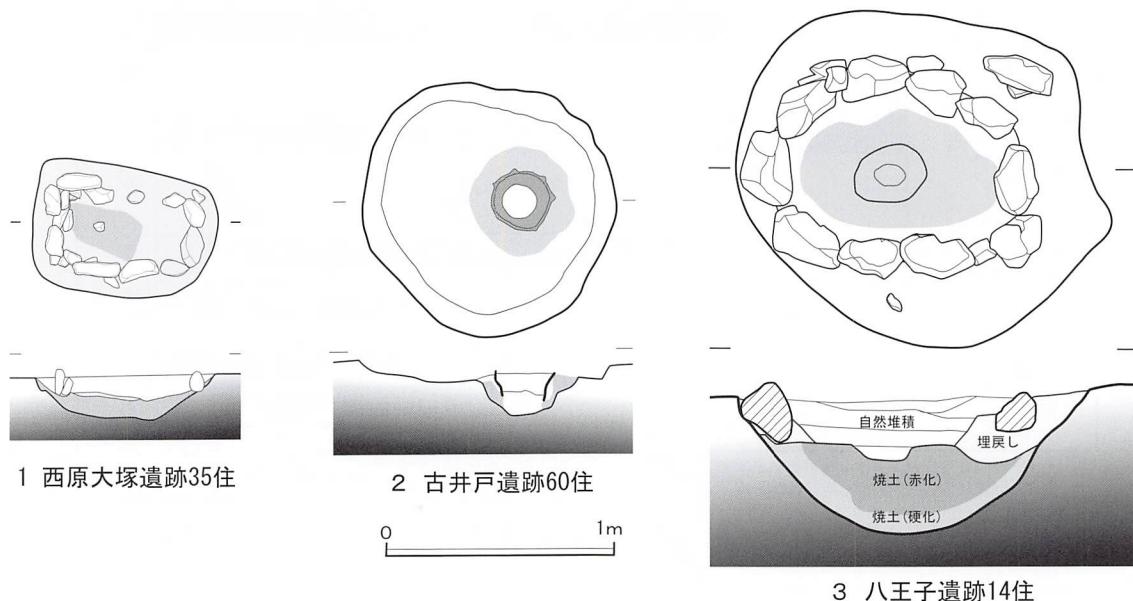
(3) 用途

炉体土器の用途を考える上で二つの重要なキーワードがある。焼土と灰である。まず、焼土について考える。三上徹也は、大形炉体土器と小形炉体土器の用途の違いを焼土の状態から類推した。氏によれば大形炉体土器内には焼土があり、小形炉体土器内にはそれが無いことから、前者はそこで焼成が行われ、後者はそれが行われていないと判断した。しかし実際には、大形・小形炉体土器にそのような焼土の在り方の相違はない。

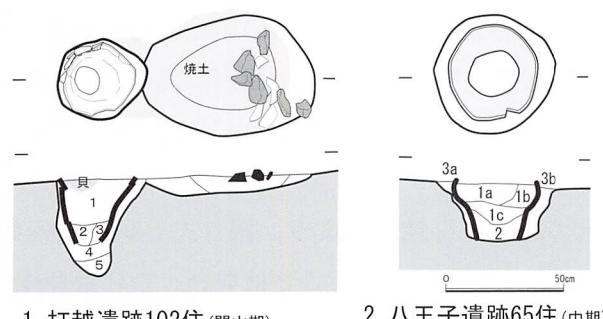
ここで炉体土器に関する焼土のあり方を見てみよう。掘り方と炉体土器の規模がほぼ同じの場合、それを取り上げた後に掘り方が焼土化していることはない。これは炉体土器内で燃焼行為が行われていないこと、乃至はそれが行われていたとしても土器外側の掘り方が赤化するほど激しいものではなかったことを意味している。一方、掘り方が炉体土器より大きい場合は、古井戸遺跡60住

例（第4図2）のようにその小形炉体土器の外側に焼土が認められる場合がある。あるいは石圓炉の石の下にも被熱痕跡や焼土が検出される例がある（第4図1・3）。このような場合、この炉は再構築したもので、これらの焼土はそれ以前の炉を使用していた時のものであるなどと説明されることが多いが、通常の煮炊きで赤化するほど被熱することはない。通常、炉には灰が充填されており、その上で煮炊きしても炉床が焼土化することはない。それに、屋内では焼土が生成するような強火では燃焼しないであろう。炉床に厚く存在する焼土や炉体土器の底部や掘り方に存在する焼土は、未だ屋根を架けない住居構築時に、炉を乾燥させる目的で空焚きした結果生じたものであろう。これらの焼土は、除湿効果を期待したものであろう。八王子遺跡14住例（第4図3）は、その場で燃焼が行われたことを最下面の「焼土（硬化）」の存在が証明している。その上の「焼土（赤化）」層は、最大厚さ30cmを計る。通常の煮炊きでは、どんなに激しく焼成してもこの深度まで赤化することはないと想定される。他所で焼成した焼土も使用して炉床を構築したものと理解したい。

次いで灰について検討するが、実はそれが検出されることはない。なぜなら「木灰の主成分である炭酸カリウムは水に溶けるし、炭酸カルシウムは酸に溶けるので骨粉と同様普通の場所では残らない」（今村1985）からである。しかし、炉内には灰が存在していたのである。そして、炉体土器の内部も大形・小形に限らず使用時には灰で満たされていた。そのため、炉体土器の内面に被熱痕跡が明確に確認されることはある。第5図は、炉体土器内が自然堆積と思われた前期と中

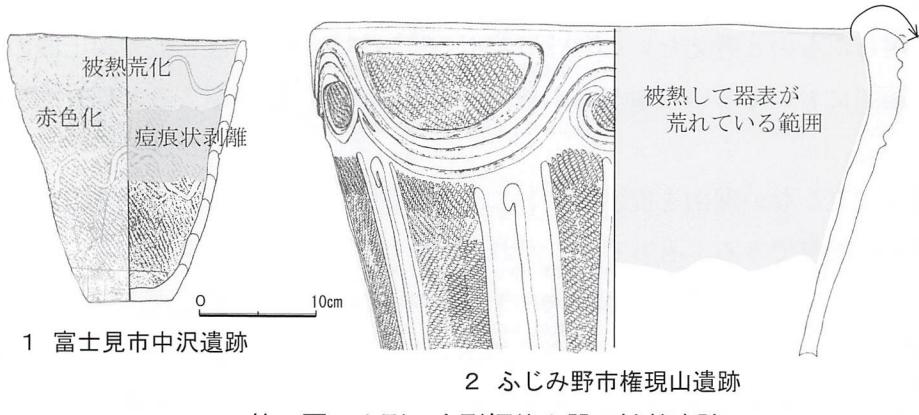


第4図 炉における焼土の在り方



第5図 埋甕炉の堆積土

期の例を示した。富士見市打越遺跡第102住例（第5図1）は、炉内埋甕炉ではないが、その周辺に焼土が及んでいることから埋甕炉と判断した。1層は自然堆積土、2～5層は、埋め戻されたものであろう。八王子遺跡65住例（第5図2）は、1層が自然堆積土、2・3層が埋め戻し土と判断した。つまり1層は灰が充填されており、それが消滅した後に流入したものと理解できる⁽³⁾。しかし、炉体土器の内部が被熱している例もある（第6図）。これは、灰の搔きだしによって、それが少ない状況で使用されたことがしばしばあったことを想定させる。



第6図 小形・大形炉体土器の被熱痕跡

炉体土器の使用方法について積極的な発言をしているのは、三上徹也である（三上1993・1995・1999・2006）。氏によれば炉体土器には、大形炉体土器と小形炉体土器があり、両者は用途が異なるという。一般的に大形炉体土器は炉を区画するための施設、所謂土器囲炉として捉えられている（炉区画説）。一方小形炉体土器は、煮沸土器を載せる施設（炉台説）と考えている。また、桐原健は種火を保存する施設、つまり種火保存説（桐原1965）を提唱した。

a 炉区画説（大形炉体土器）

大形炉体土器（大凡口径30cm以上）は、床面より数cm突出して埋置されており、炉を区画する意図で施設されたものと思われる。しかし、被熱範囲は炉体土器以外にも及んでおり、厳密に炉の区画を規定しているものではない⁽⁴⁾。

ところで、三上は大形炉体土器内には焼土が存在することから、この中に燃焼が行われたとした。しかし、この中に土器を設置すると燃料を入れるスペースが無くなり煮沸することは困難となる。そこで苦肉の策として煮沸する土器を吊して下から煮沸すと考えたようである。しかし、煮沸土器を吊すことと炉体土器の存在理由に必然的な関連はない。単なる地床炉でも良いのである⁽⁵⁾。

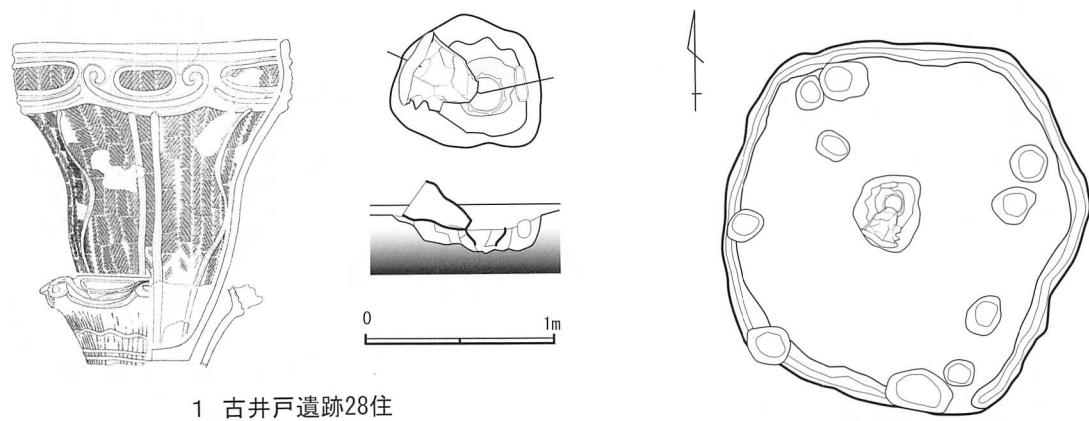
b 炉台説（小形炉体土器）

三上は、小形炉体土器を炉台と考えている。それは、炉体土器内に焼土がないこと、つまりそこでは焼成が行われなかつたとした⁽⁶⁾。そこから「据える」土器の存在を想定した。また、細田勝も宿東46住に埋設された小形炉体土器の説明において「この種の『炉体土器』に関しては、燃焼主体部を囲うという本来的な意味合いよりも、火にかけた煮沸具＝土器の底部を安定させるための支脚の機能を想定するのがより自然ではあるまいか」（細田1998）とした。ここで言う炉台説とは、あくまで煮沸のために煮沸具を据え付けるための台という認識である。実際、東松山市岩の上遺跡6住（栗原1973）や本庄市古井戸28住（宮井1989）居跡では、小形炉体土器に大形深鉢が載せられた状態で出土している（第7図）。この二例から見る限り煮沸器は、炉体土器にすっぽりと嵌り込み、自立よ

りも遙かに安定して正立することができる。これは、小形炉体土器の使用状況である。しかし、土器の加熱部を炉体土器が覆う事から煮沸には不向きであることも事実である。

ところで、主炉に接して小形土器を埋設した施設が多々見られる（第8図）。さいたま市鴨谷遺跡30住例は、その1例である。伊奈町原遺跡6住例は、土器は埋設していないが焼土が存在している。富士見市中沢遺跡16住例は、礫に分割された炉の縁辺に土器が埋設されている。これらは、煮沸後の保温・安定設置のための炉体土器と思われる。なお、深谷市東光寺裏5住や伊奈町志久4住では、炉に近接して胴部を欠失した土器が置かれた状態で出土している。本例も煮沸された土器の置き台として使用したものと考えたい（第9図）。但し、炉体土器の口径と被煮沸土器の接する部位の径が適合する範囲においてという事が必須条件である。この範囲を超えると却って不安定になろう。

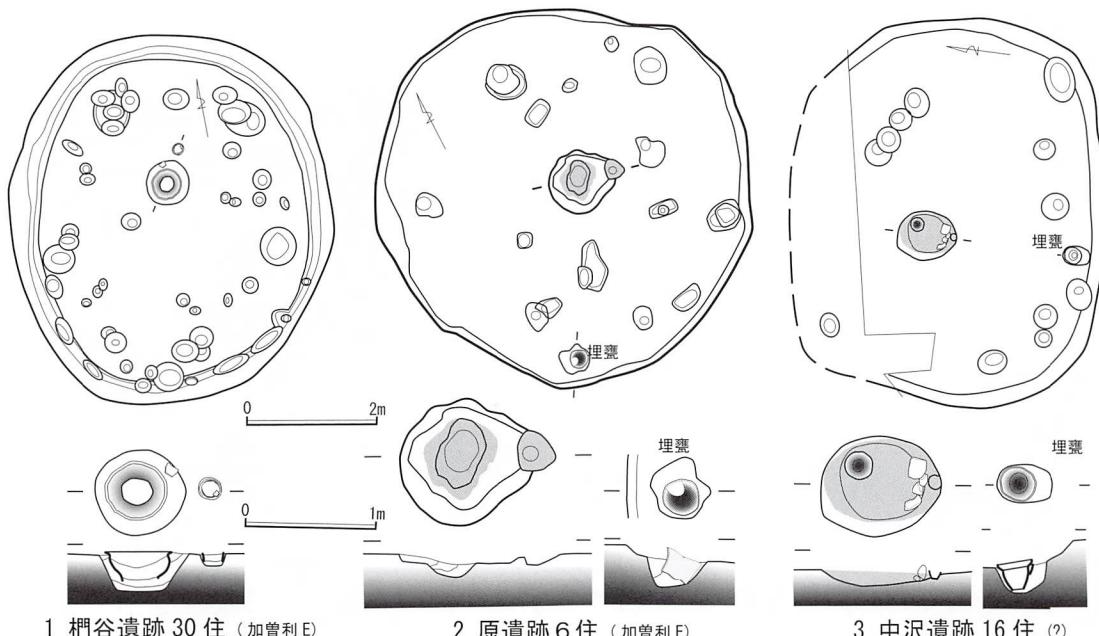
ここで炉台説が成立しない理由を提示しておこう。①炉台であるならば、炉体土器を倒立して設置する方が効率的に加熱できる。もちろん、割れ口が平坦であることが条件である。正立した炉体土器に据えると言うことは、被煮沸土器が入れ子状になる。つまり、被煮沸土器の底部は、炉体土器にすっぽり収まることになり、これでは直接加熱できない。②また毛呂山町まま上遺跡5c住例（金子2001）のように口縁部に突起のある炉体土器では、土器を安定して設置することができない（第10図）。③炉台であるならば、必要以上の器高を必要としない。また置けば済むのであり、埋め込む必要はない。④炉の縁辺に埋置された偏在型の小形炉体土器の存在は、一方向からのみの加熱であり煮沸効率は極めて悪い。⑤また、小川町八幡台1住（栗島1999）のように小形炉体土器を中心



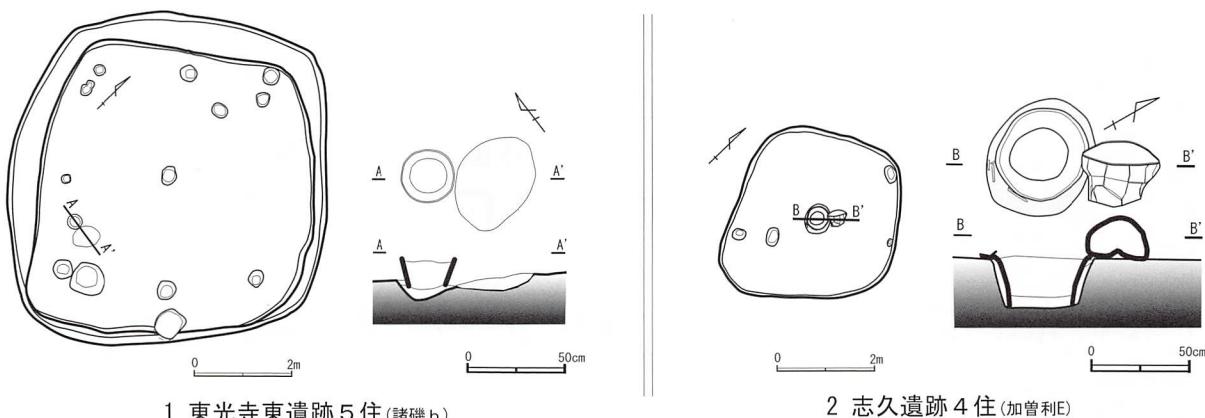
1 古井戸遺跡28住



2 岩の上遺跡6住
第7図 炉台として使用した例



第8図 炉と付属炉体土器

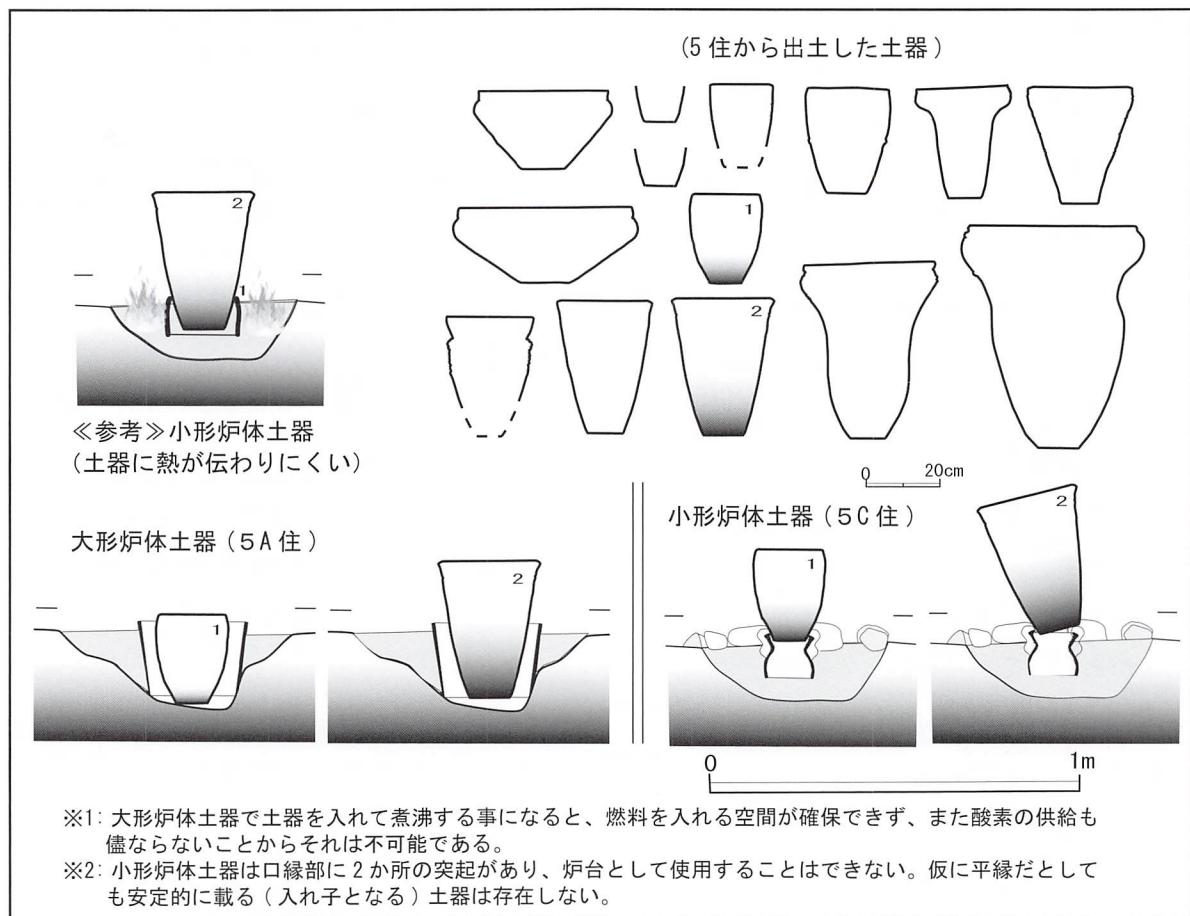
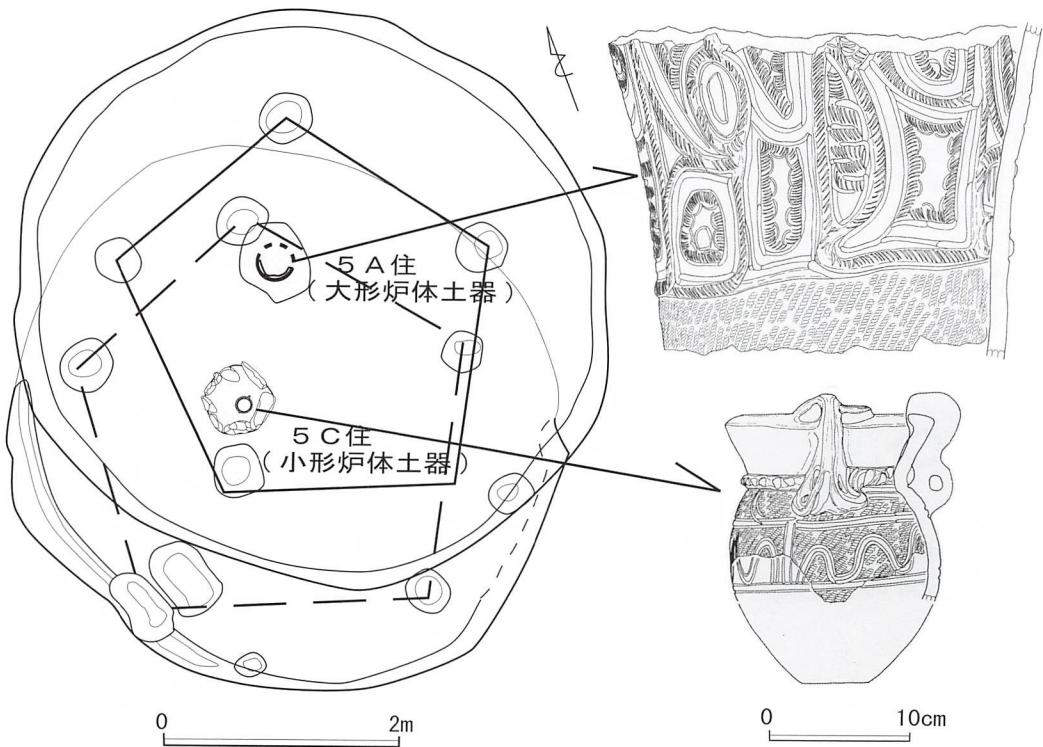


第9図 炉と置き台

央に傾けて設置しているものも散見され、これでは炉台としては不都合である。⑥次いで中期の炉台（一般的に「器台」と称されることが多い）の存在である。炉台として特化した器種が存在する訳であるから、同一の用途に別種の炉体土器を炉台として使用するのは不自然である。炉体土器を炉台として使用するならば、伏せて底部を利用すれば事足りる。やはり炉体土器は“容器”としての意味があるのであろう。

c 種火保存説（小形炉体土器）

本説の提唱者は、桐原健であろうか。氏は「中期初頭八軒の住居址中、七軒までが深鉢土器を埋め込んで火壺とした埋甕炉で、残った一軒は規模の小さい石囲炉……。炉に使用されている深鉢形土器の口径は二十センチ程度……」（桐原1965）と記している。炉体土器を「火壺」と考えた根拠に民俗例を参照しているのでそれを紹介しておこう。「囲炉裏の一方から大きな薪を入れ、一方からそだ類を入れて交叉させて焚いているが、その交叉する下におき（火種）をいっている。この囲炉裏の中の火壺に相当するものが埋甕炉ではなかったろうか」（桐原1965）とした。その後も「縄文時代中期に見られる埋甕の性格について」（桐原1967）に「火壺」の用例がみえる。この火壺が



第10図 まま上遺跡5住の埋甕炉の使用想定図

火種保存説の先駆けになった。本説は、その後多くの報告書で採用され、同様な説明がなされている⁽⁷⁾。

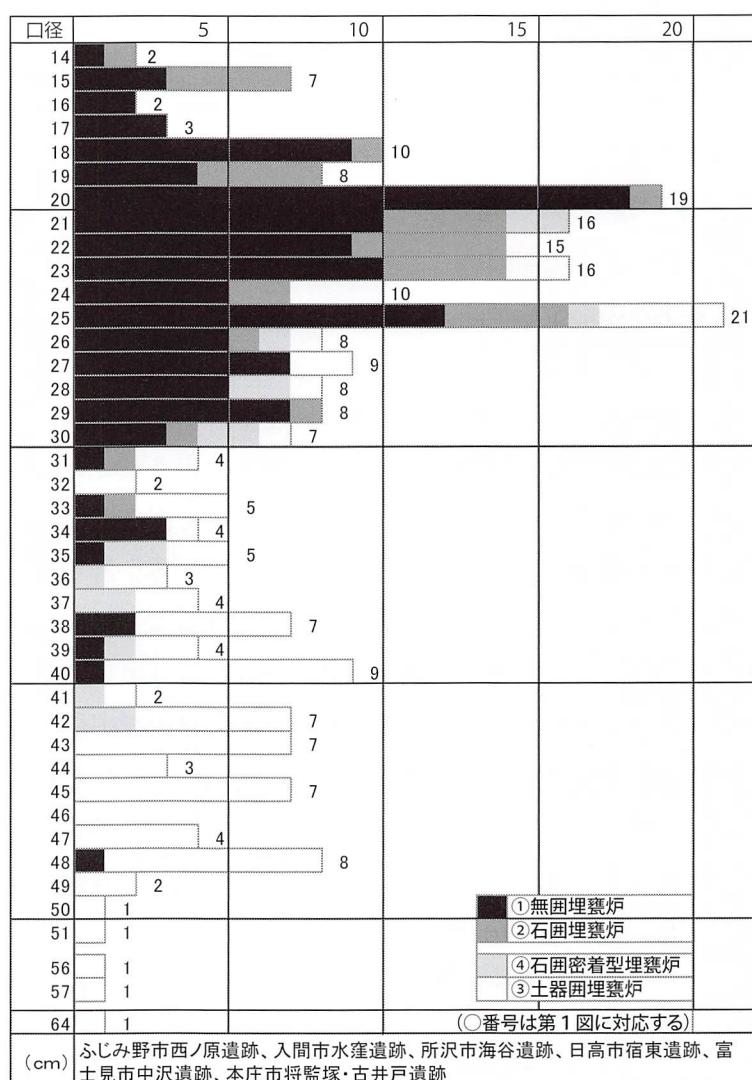
該期に発火は容易ではないとの仮定から種火保存を想定し、その役割を炉体土器に假託したのである。それでは埋甕炉が存在しない場合、種火は保存できないのであろうか。否である。土器内に火種を保存する必然性は無いが、保存することは可能であり、それを否定するつもりはない。種火は、灰中の一定の深さに埋置しておけば翌朝まで消えることはない。しかし、その管理には技を必要とするようである。マッチなどの簡易な発火具が採用される以前では、火種の保存は主婦のたしなみであり、隣家にそれを借りに行くのは恥ずべき行為であったという（飯島1985）。

(4) まとめ

炉体土器には、大形と小形がありそれぞれ機能が相違すると捉えられていた。前者はa炉区画説、後者はb炉台説・c種火保存説である。しかし小形炉体土器（第11図①・②）と大形炉体土器（第11図③・④）は、感覚的で便宜的なものにすぎず、その法量推移は漸移的なものである（第11図）。つまり両者を明確に分類することはできない。

更に、上記の各説についても成立しないことは前述したとおりである。そこで本稿では、主に蒸焼調理に特化した施設であるとの説を提示したい。灰中に対象物を埋め、その上で行う燃焼や熾き火による熱を利用して調理する方法を本稿では広義に理解して蒸焼調理と称することにする⁽⁸⁾。

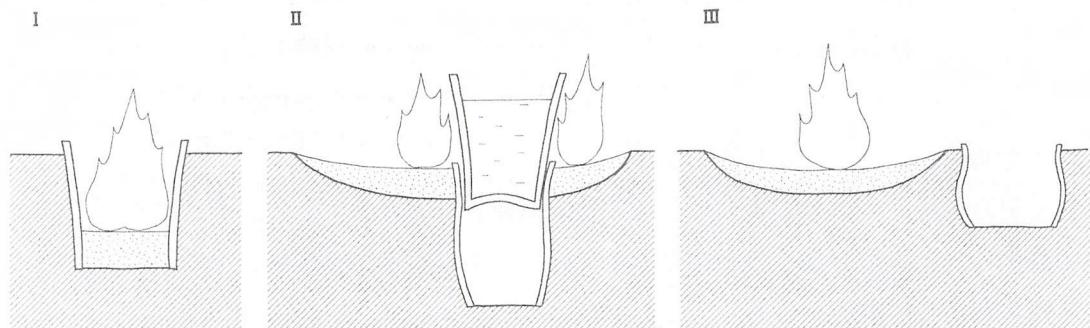
炉体土器は大形・小形とも一般的に内部はそれほど被熱していない。そして筒抜けのその炉底が被熱していることもない。それは、内部に灰が満たされていたからである。この灰で満たされた炉体土器内で、蒸し焼きが行われたのである。その対象は、木の実や芋類などの植物食料や肉類などであろう。蒸し焼きは、灰中に埋めその上で燃焼させれば可能な簡便な調理方法である。敢えて炉体土器を必要とするものではないが、その存在は調理対象物の位置が特定できるメリットがある⁽⁹⁾。それでも埋甕炉存在の第1の理由は、「流行」という時代の要請に基づくものと考えたい。炉体土器の主要な用途は、蒸焼調理と考えるが、種火保存や加温・保温用としての炉



第11図 炉体土器の口径分布

台としての可能性もあり、蒸焼調理施設に限定して考える必要はない。なお、複数の炉体土器を有する埋甕炉は、旧炉体土器が遺存したと報告される例があるが、同時存在・使用の可能性も考慮しなければならない。

ところで、横田光男は前期の炉と埋設土器の位置関係を以下のように分類し、その用途や使用方法について言及した（横田1984）。分類は「I、炉体 II、埋設土器が炉の堀り込みの中にある。 III、埋設土器が炉に隣接する。 IV、埋設土器が炉から離れている。または炉に無関係に存在する（IVは未図示）」（第12図）の4種である。そして、Iは埋設土器の「中で火を焚いたもの」、IIは器台、IIIは炉の付属施設と捉え火種壺としての用途を推定している。IVは中期の埋甕に続くものと捉えた。



第12図 炉と埋設土器使用推定復原図（横田1984）

2 埋 甕

(1) 分 類

埋甕は、埋設場所によって屋内と屋外に大別されるが本稿で扱うのは屋内埋甕に限定する。使用される土器の部位や埋設方向（正立・倒立）などは多様である。

(2) 出現と展開

埋甕は早期末には出現するのであろうか。小川町越場遺跡では、住居と認定されている訳ではないが1号竪穴状遺構（黒坂1999）で伏甕が検出されているが、現時点では富士見市打越遺跡73住などで見られるように花積下層式期に出現すると捉えておく。その後、前期には各期を通じて散見する。該期の埋甕は、埋甕を有するCピットや炉体土器とも区別しがたい。つまり埋甕は炉を意識した住居の中央付近にあり、壁際には設けられることは無いが、やがて炉から離れて周辺に移動する傾向にある。また、複数埋甕も顕著に存在する（第13図）。

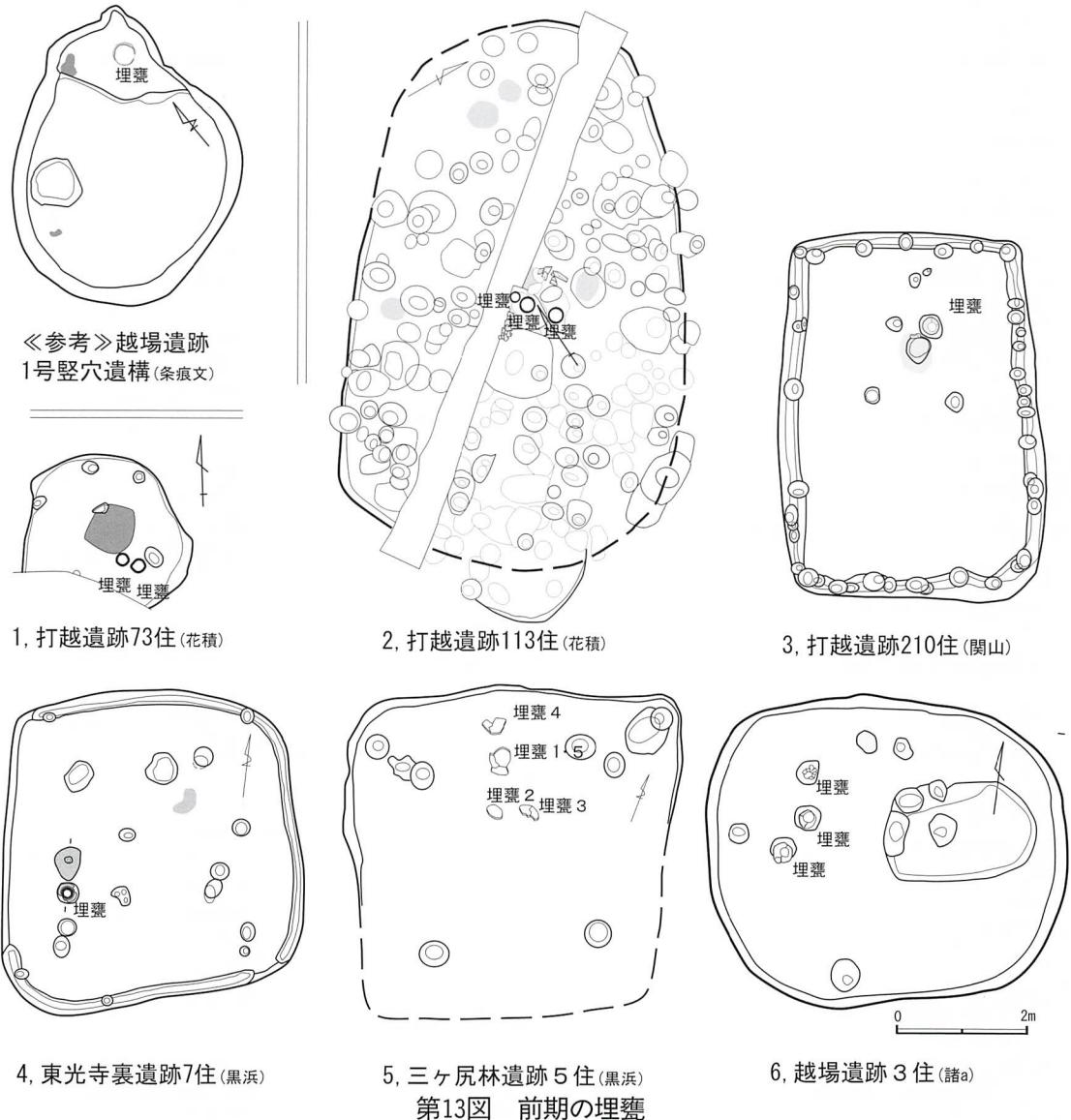
中期前半の状況は不明であるが勝坂期末には再び出現しその後盛行するが、後期堀之内期には消滅する。桐原健は、屋外埋甕が中期後半に屋内に取り込まれ、奥壁部埋甕・炉辺部埋甕を経て出入口部埋甕が成立すると考えた（桐原1983）。確かに中期では炉の正面、つまり多くの場合は南壁際に設置されることが多いが、厳密に言うならば、中央よりやや偏った壁に埋置されることが多い。

(3) 用 途

前期の埋甕については検討されることは無かったが、中期の埋甕には長い研究の歴史がある。第1表は、埋甕の用途に関する説をまとめたものである。なお各説は、それぞれ埋甕に対する概念が相違することをお断りしておきたい。

a 貯蔵施設説

埋甕は、その存在が認識された戦前の研究では、食料や生活資材の貯蔵施設と考えられた。大場磐雄は「住居址に附属する設備であって、床面の一隅またはやや離れた同一床面に、口を上にして甕形土器を埋め、時には扁平な石を以て蓋をした場合等であった。これは主に生活に関連した遺構で、食物等の貯蔵庫とでも解し得る場合が多く」(大場1955)としている。宮坂光昭も勝坂期には湿度を避け乾燥に適した食料は「鍔付有孔土器」、一定の温度と湿度を必要とするものは「立坑」に貯



第13図 前期の埋甕

氏名	発表年		用 途				備 考	文 献
	西暦	和暦	貯蔵	骨壺	胎盤収納	他		
鳥居 龍藏	1924	大正13		甕棺				『諏訪市史』
八幡 一郎	1932	昭和7	貯蔵施設					「下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡貝塚ト其ノ貝層下発見ノ住居址」『東京帝国大学理学部人類学教室』
後藤 守一	1932	昭和7	食物	小児甕棺?				「船田向石器時代住居址」『東京府史蹟保存物調査報告書』第10冊
谷川 磐雄	1933	昭和8	食物・その他				・食物・その他	「南伊豆高石器時代住居址の研究」『考古学研究録第1号 石器時代の住居跡』
八幡 一郎	1940	昭和15	貯蔵施設	棺			・両説併記	「日本先史人の信仰の問題」『人類学先史学講座』

第1表 埋甕の用途に関する説の推移 (1)

氏名	発表年		用 途			備 考	文 献
	西暦	和暦	貯蔵	骨壺	胎盤収納		
宮坂 英式	1950	昭和25	(否定)			呪術的なもの	・貯蔵施設説に疑問・呪術的効果を祈願する思惟の処置 「八ヶ岳西山麓与助尾根先史聚落の形成についての一考察（上）・（下）」『考古学雑誌』36-3・4
大場 磐雄	1955	昭和30	貯蔵施設	幼児甕棺			・両説併記・逆位埋甕のみ幼児埋葬・骨壺説は屋外埋甕から類推。
宮坂 英式	1957	昭和32	○	○			・貯蔵施設説に疑問 『尖石』茅野市
宮坂 光昭	1965	昭和40	食料貯蔵庫				・正位は短期、逆位は長期の保存施設 『縄文中期勝坂と加曾利E期の差』『古代』第44号
渡辺 誠	1965	昭和40		幼児深鉢棺			・民族例を参照。 「縄文時代における原始農耕の展開と埋葬観念の変質」『山梨考古学論攷』
桐原 健	1965	昭和40	貯蔵用？			宗教的	・貯蔵用とも考えられるが、底部を欠いたものなどがあり、宗教的な遺構と考えられる。 「住居址内における火使用の問題」『井戸尻』
桐原 健	1967	昭和42		幼児・胎児埋葬	胎盤収納		・逆位は骨壺、他は胎盤収納、民族例も参照。 「縄文中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』18-3
渡辺 誠	1967	昭和42		深鉢棺			・前年千葉県殿平賀貝塚で骨と歯を検出・民族例参照 「縄文時代における原始農耕の展開と埋葬観念の変質」『山梨考古学論攷』
渡辺 誠	1968	昭和43		深鉢棺			「埋甕考」『信濃』第20巻第4号 信濃史学会
渡辺 誠	1968	昭和43		深鉢棺			「埋甕考（続）」『古代文化』20-7
水野 正好	1969	昭和44		幼児埋葬			・供犠的性格を有する。 「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化』21-3・4
藤森 栄一	1969	昭和44		小児甕棺	胎盤収納		・両者とも有り得るとした。 『縄文の世界』講談社
渡辺 誠	1970	昭和45		幼児甕棺			・殿平賀貝塚で幼児骨を検出。 「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40 ニューサイエンス社
木下 忠	1970	昭和45			胎盤収納		・「感染呪術」で補強。 「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル』46 ニューサイエンス社
木下 忠	1973	昭和48			胎盤収納		・民俗例参照・弥生時代以降の竪穴住居跡の貯蔵穴も胎盤収納とした。 「埋甕といわゆる貯蔵穴について」『信濃』25-8 信濃史学会
長崎 元広	1973	昭和48		幼児埋葬			・入口部に存在するものに限定。 「八ヶ岳南麓の縄文中期集落における共同祭式のあり方とその意義（上・下）」『信濃』第25巻第4・5号 信濃史学会
猪越 公子	1973	昭和48					「縄文時代住居址埋甕について」『下総考古学』5
神村 透	1974	昭和49			精靈封じ込め		・伏甕に限定。 「埋甕と伏甕—そのちがい—」『長野県考古学会誌』19・20 長野県考古学会
高山 純	1974	昭和49			ネズミの落とし穴		・胎盤収納説を否定。 「周辺地域の産屋・竹べら・胎盤処理方法」『どるめん』3号
佐々木藤雄	1975	昭和50			祭祀？		「埋甕論ノート」『異貌』三 共同体研究会
佐藤 洋	1976	昭和51		幼児埋葬			・分布の在り方から通婚圏にまで言及。 「縄文時代の埋甕習俗」『物質文化』27 物質文化研究会
水野 正好	1978	昭和53			犠牲獸骨壺	・建築儀礼	「埋甕祭式の復原」『信濃』第30-4 信濃史学会
田中 信	1982	昭和57			火の浄化		「埋甕形態論」『土曜考古』第6号 土曜考古学会
桐原 健	1983	昭和58			思惟的なもの		・出入口部に設けられた思惟的な性格。 「埋甕」『縄文文化の研究』第9巻
金子 義樹	1984	昭和59		幼児甕棺			・魂を迎い入れること、更には生産に結びついた思惟的な行為。 「縄文時代における埋甕についての一試論」『神奈川考古』第19巻
川名 広文	1985	昭和60			境界標		「柄鏡形住居址の埋甕に見る象徴性」『土曜考古』第9号 土曜考古学会

第1表 埋甕の用途に関する説の推移（2）

蔵したと捉えた。しかし加曾利E期には前者は消滅し、後者のみが埋甕に受け継がれたと捉えた(宮坂1965)。

b 骨壺説

昭和30年、大場磐雄は、逆位埋甕を幼児甕棺と考えたが、これは屋外埋甕からの類推であった。昭和40年、渡辺誠は民族例などを参考にして幼児甕棺説を唱え、昭和42年には殿平賀貝塚(遺跡)検出の住居内土壙から幼児骨と歯を検出したことに意を強くして、幼児甕棺説を力説した。しかし本例は、土壙内の幼児骨を大形土器片で覆う後期のものであり、中期に盛行する通常の屋内埋甕とは全く相違するのである。そして、1973年に長崎元広が本説を主張した最後の人物となる。なお、千葉県権現原貝塚では「住居跡を被覆する貝層があり人骨の保存条件を充分に満たしている。にもかかわらず、(埋甕からは)骨片すら発見できていない」(渡辺1991)という。

c 胎盤収納説

昭和42年、桐原健は逆位埋甕を甕棺、他を民族例を参照にして胎盤収納説を唱えた(桐原1967)。胎盤収納説は、昭和45年以降、木下忠が本説首謀者となる。民俗・民族例を駆使して補強に努めた。胎盤の検出は不可能であるために、状況証拠から類推するしかない説である。近世の民俗例と縄文時代との時間的な間隙が大きいが、それを埋める作業も行われた。つまり、縄文時代以降(弥生・古墳・平安時代)の竪穴住居跡で「入口部」・「貯蔵穴」と捉えられていたものを、それに充当させたのである(木下1973)。しかし、所謂該期の「貯蔵穴」は、①覆土が自然堆積であり、空洞のまま使用していたこと。②縄文埋甕とは、比較にならない程規模が大きいこと。③埋甕が存在しないことなどから、縄文埋甕と近世以降の胎衣壺との間隙を埋める資料とは考えられない。更に、弥生時代の貯蔵穴とした入口部のピットは梯子穴の蓋然性が高く、また古墳時代の貯蔵穴はその名のとおりの用途として間違いないような状況を示す遺構が多出している。よって、これらの「貯蔵穴」を胎盤収納説とする説は成立しない。

土間に胎衣壺を埋めるのは実在した習俗であり、歴史資料にも紹介されている事実である。木下忠が紹介した元禄5(1692)年編纂の『女重宝記大成』には、胎衣を土間に埋める様子が描かれ、更に次のような記載がある。「下々の産には、胎衣を薦につつみ路道に捨つるを……」とある。これによれば、胎衣壺を土間に埋めるのは「上流階級」の習俗であり、庶民は特定の容器を使用することも無く、曲物やザルあるいは古布に包んで墓や忌み場に埋めたようである。縄文時代の習俗が近世の「上流階級」のみに伝承していたとは考え難い。近世の「上流階級」の習俗が、近代の庶民まで波及していったと考えるのが自然である。

なお平城京から和同開珎5枚が入った胞衣壺とされる蓋付きの壺が発見された。同様な例は美濃国分寺門付近からも2例確認されている。また近世では蓋付き腕形土器が胞衣壺として確認されている(渡辺2009)。これらの胞衣壺は、口径10数cm程度の蓋付きの壺や腕などの小形品であり、縄文埋甕より遙かに小さな容器である(野代2008)。

(4) まとめ

第1表によれば1960年代中頃までは貯蔵施設説、そして'70年代以降は幼児骨埋納説・胎盤収納説が主流となり、現在では胎盤収納説が定説化している⁽¹⁰⁾。しかし多くの研究者が埋甕に関する論考を発表し続けたが、定説を容認するものは少なく、新説が多出した。しかし、その何れの説も支持されていない⁽¹¹⁾。

ところで、貯蔵施設説が否定された理由は幾つか存在する。宮坂英式は、「貯蔵を目的とするならば出入りの繁し南側よりむしろ他の位置に選定せらるべき筈である」(宮坂1950)とした。桐原健は「炉石や立石が再使用された時にも手付かずであった埋甕には、何か忌避される物質が納められていた」と推定し⁽¹²⁾、更に食料の貯蔵法は「床面上に積みあげてあるか、炉上の火棚に置かれるか、戸外にピットを穿って貯えるか」であり、埋甕を利用することはその法量から見て「合点がいかない」と貯蔵説を否定した(桐原1967)。

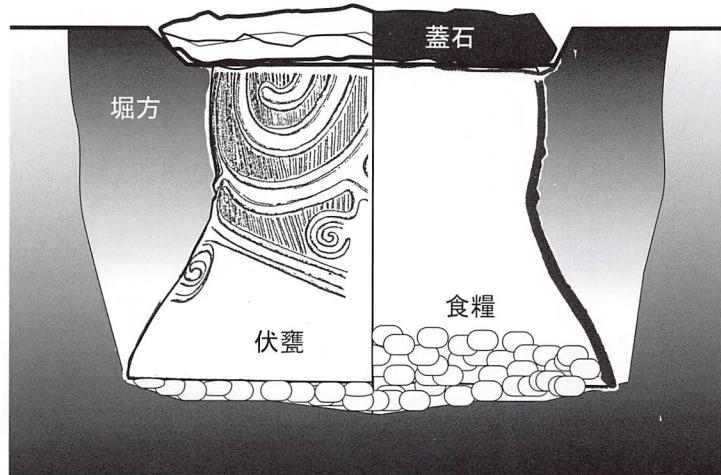
そして、1970年代前半に胎盤収納説・幼児骨埋納説は主流となった。特に、胎盤収納説は、桐原健や木下忠によって主張されて定説となった(桐原1967・木下1981)。胎盤収納説を肯定する論点の一つは、埋甕が入口部であることから踏まれることによってより強い再生を願うという民俗例からの援用にあるが、民俗例に見られる胎衣壺は、地中に埋められるものであり、容器が地上から見えることはない。しかし埋甕は、床面より突出して埋置されているのが通例である。蓋が存在するとなると、床面からの突出は更に高いことになる。このような状況で、埋甕を踏む事は適わない。また踏むことを意識して、胎衣壺を土で満たすならば可能であるが、埋甕の覆土は自然堆積であり、使用時には空洞であったのである。佐原眞も木下忠の民俗例を援用した状況証拠の羅列による推論に對して「百万の民俗例をもってしても（中略）組しがたい」(佐原1972)と検証方法に問題があるとした。井之口章次も胞衣を焼き物に入れて戸口に埋納するのは、多様な処理方法の一例であることを指摘している。つまり、中期の埋甕と胞衣壺との関連に疑義を呈されている(井之口1970)。それでも胎盤収納説は、定説化している。

縄文時代の出産風俗については知る由もないが「産小屋」が存在したことが予想される。「死」に関わる忌み・不淨の胞衣を「生」の住まいに埋置したのだろうか。しかも、床面から突出した目に触れる状態で埋置したのだろうか。民俗例では、通常の生活で実見できる状態で埋置した例は無いのではないだろうか。

胎盤収納説は長野県富士見町の唐渡宮遺跡出土のお産の情景を描いた土器、幼児骨埋葬説は「骨」の検出例がその根拠の一つになっている。しかし前者は完形品であり破損品を再利用する通常の埋甕とは相違するし、後者についても本稿で言う「埋甕」からの検出例は存在しないのである。これらの両説は、縄文人の出産や死への恐怖、乳児・幼児との惜別と再生願望⁽¹³⁾の情を推し量り、それに共感して流布・定着した説のように思える。更にまた、弥生時代の再葬墓・甕棺墓のように土器に遺骨・遺体を埋納する事実を、似て非なる縄文埋甕に投影させたと言えば言い過ぎであろうか。

もしこれが中期の埋甕と関連があるとすれば、その解釈に新たな視点を提供してくれるかも知れない。前期の埋甕は、中期のような南壁や入口部ではなく、炉に近接して存在している。つまり炉と埋甕は、一体化した施設として捉える事が可能である。埋甕炉とは、炉に取り込まれた埋甕である。

或いは、その逆で埋甕は、炉体土器が炉から独立して出現したのかも知れない。前期の富士見市打越遺跡102住の炉の状況は前述した(第5図)が、本炉は住居跡の奥壁側に設置されており、その奥側に数個の礫を枕石とし、手前には埋甕を配している。また埋甕は「炉とともに機能したもの」(小出1983)であり、両者が同時存在していたことがわかる。また、さいたま市深作東部遺跡10住では、炉に近接ないし縁辺にある埋甕が炉側に傾いている(黒坂1984)。これは、埋甕が炉を意識していることを示唆している。野村智も中期例ではあるが炉と近接する埋甕が「セット」であること



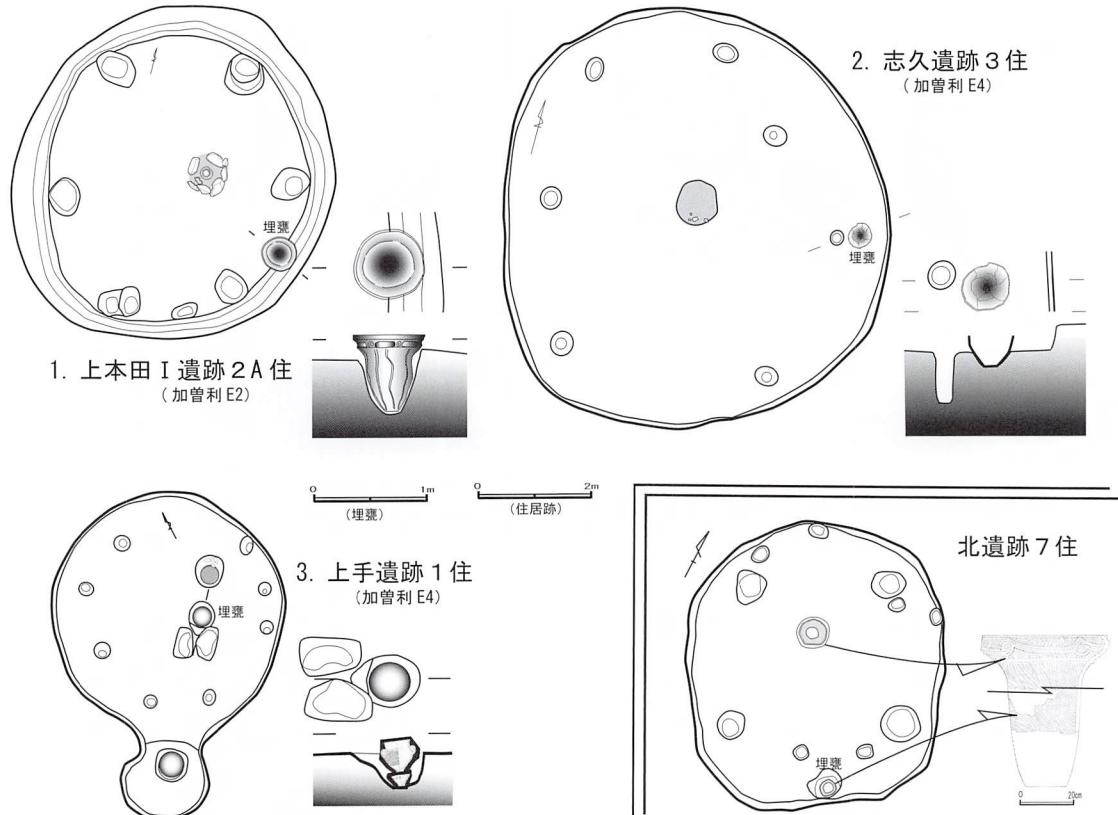
第14図 石蓋を持つ埋甕（佐藤1971より改変）

を指摘している（野村1992a）。更に後期柄鏡形住居跡例であるが、千葉県権現原遺跡では、柄鏡部の埋甕は斜めに埋納されており、「傾斜方向はすべて内側、中軸線方向で、ちょうど炉に向くかっこうとなる」（渡辺1991）という。第15図の柄鏡形住居の出入口部の土器も内側（炉側）に向いて埋設されている。

実際に東筑摩郡山形村洞遺跡2住の埋甕は空洞であったことを土屋長久の話として高林重水は紹介している（高林1971）。同様な例も多くあり、基本的に埋甕は、空洞の状態で使用され、更に通常は蓋が被せられていたのである。桐原健によれば、信州の中期例では「……正位埋甕にかかる施設として石蓋があるが、置かれる率は三割弱とけっこう多い。石蓋以外の付属施設としては（中略）植物質の炭化物で被われ」（桐原1983）ていたという。つまり、埋甕は、蓋を被せて使用していたことになる。石蓋例は、「長野県78例、神奈川県10例、群馬県6例」等と記され、埼玉県では未発見であるという（金子1984）。検出例の多寡は、礫採取が可能か否かの自然環境に規制されての結果であろう。なお、第14図は、茅野和田遺跡例（佐藤1971）から作図したものである。本遺跡を含む信州では、正立・倒立⁽¹⁴⁾を問わず石蓋を有する埋甕が顕著に認められる。石蓋を有する埋甕は、床面より若干深く埋められており、蓋石の上面が床面とほぼ等しくなるように設置されている。これは、Cピットに石皿を被せた状態と酷似する。

土器を利用した貯蔵も想定できる。貯蔵穴に比較して土器を自由に移動することができる利点がある。土器の倒立を防止するためには、伊奈町志久遺跡3住のように床面を少し掘り窪めたり（第15図2）、深谷市上本田I遺跡2A住のように土器をそのまま埋めることもあった（第15図1）。北本市上手遺跡1住例は、ピット内に石鏃などを入れた土器を納め石皿片で蓋をしている。更にその上に土器を納めている。このピットは炉に近接していることから、それに関わるものと想定される。この中の二つの土器は、常設されたものではなく移動可能なものであろう。何れにしろ使用できる土器が無ければ、それを利用して埋甕とした。埋甕の実態とは、そのようなものではないだろうか。

次いで、埋甕からの内容物の出土例を見てみたい。桐原健によれば、出入口部埋甕からは、石器・土器・骨片・炭化物の出土例があるという。更に、「炉辺部埋甕中に獸骨片の存することはつとに知



第15図 埋甕の設置状況

第16図 同一土器を利用した炉体土器と埋甕

られ……」(桐原1983) ているという。つまり、埋甕は、動物や植物の食料の地下貯蔵施設なのである⁽¹⁵⁾。前期の埋甕例ではあるが黒坂禎二は、小川町越場遺跡の埋甕（諸磯a）について「日常生活具あるいは食糧のストックなど頻繁な利用が考えられる」(黒坂1999) とした。

なお、北遺跡第7号住居跡（金子1986）では、同一個体の土器を炉体土器と埋甕に使用している（第16図）。これは、住居構築の時点で埋甕が必要な施設であったことを物語っている。これが直ちに骨壺・胎衣壺を否定するものではないが、本説を否定する状況証拠にはなり得るのではないだろうか。

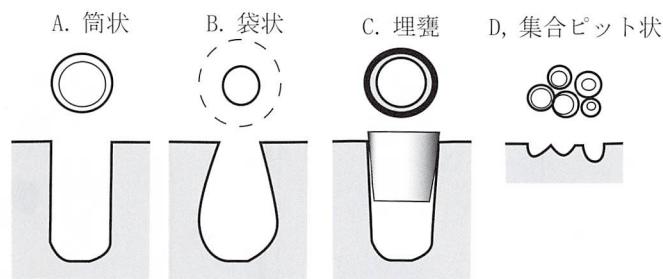
ところで、埋甕の埋設場所（住居跡中央か壁際など）・部位（口縁部や胴部など）・方法（正立か倒立など）・種類（器種や文様要素など）などに何らかの意図を読み取ろうとする見解が多いが、それには大きな意味を見出すことができない。

以上のことから埋甕は、主に食料を貯蔵・保管・保存するための施設であると結論する。

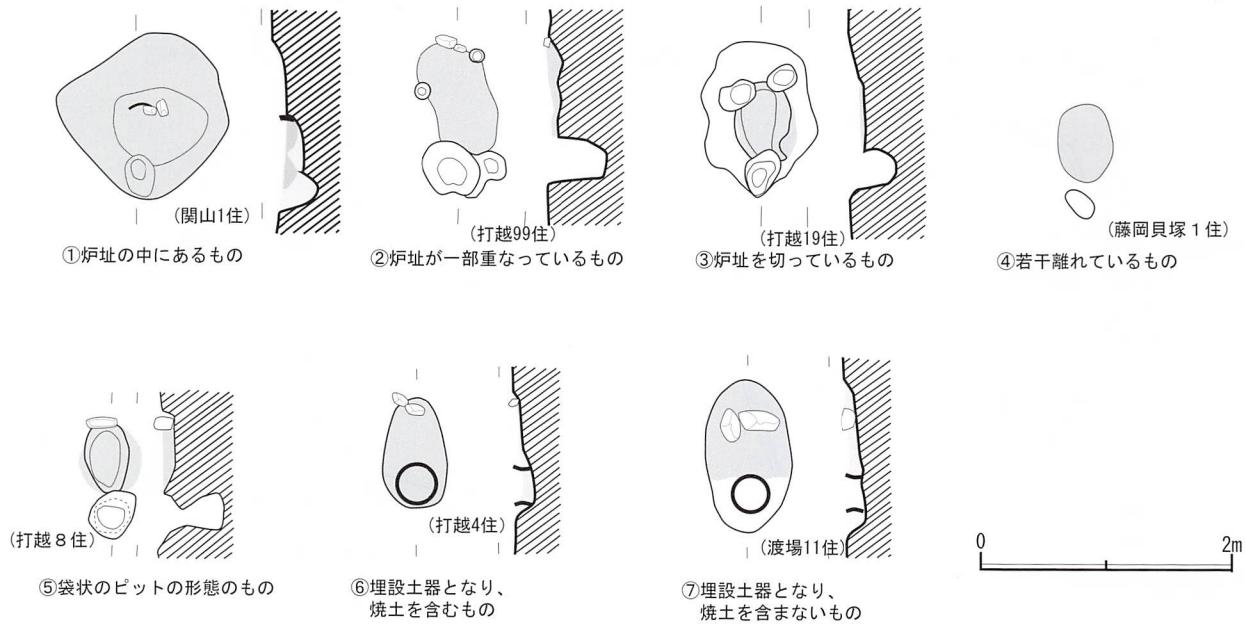
3 C ピット

(1) 分類

笛森健一は、縄文前期の住居復元を試みる作業の中で、炉と関わる特異なピットの存在に気付いた。所謂、Cピット⁽¹⁶⁾である。関山貝塚第1号住居跡の特徴の一つとして「炉址に重なってピットがある。これをCピットとする」(笛森1981a) としたのが初現である。そして、「形状については、埋甕、柱穴状、袋状、集合ピット状のもの、等々である」とした（第17図）(笛森1981b)。氏の分類によれば、あらゆる穴がCピットとなる可能性がある。また、関山期のCピットに限定した



第17図 Cピットの形状 (笹森1981b を図化)

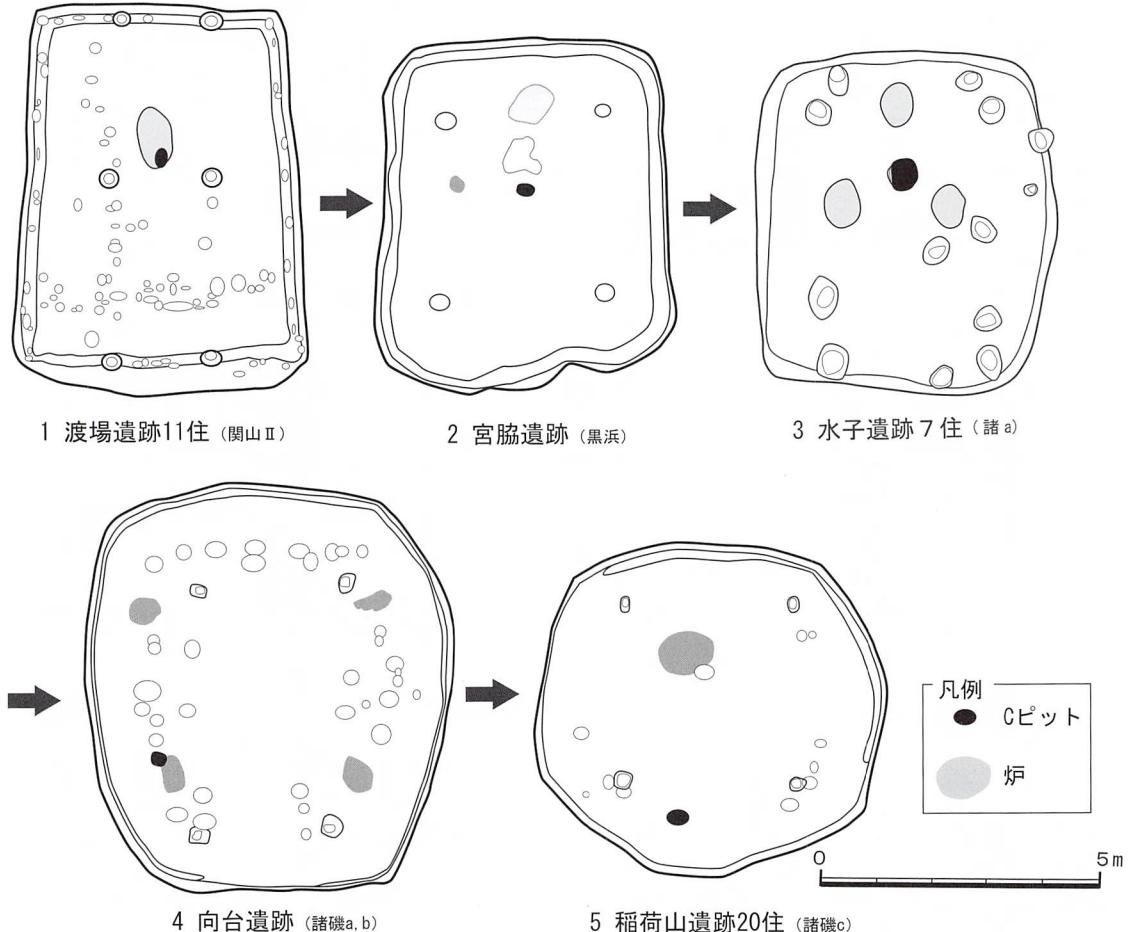


第18図 炉とCピット位置 (笹森1981a)

ものであるが、炉との位置関係から次のように分類した。なお、これらは「炉址の下方に位置」していることで共通している。「①炉址の中にあるもの⁽¹⁷⁾ (関山1住・打越14住) ②炉址が一部重なっているもの (打越99住) ③炉址を切っているもの (打越1住、17住、11住、19住、88住) ④炉址と若干離れているもの (藤岡1住、上福岡M号住、打越7住) ⑤袋状のピットの形態のもの (打越8住、17住、3住(?)) ⑥埋設土器となり、焼土を含むもの (打越4住、長尾台1住(?)) ⑦埋設土器となり、焼土を含まないもの (渡場11住)」(笹森1981b) と7種に分類した。第18図は、 笹森が示した資料を図化したものであるが、形と炉との位置関係の分類が混在しており、充分に整理されていない。炉と位置関係で見ると①・⑥・⑦は重複、②・③・⑤は一部重複という共通の要素でまとめることができる。但し、③は「切っている」としていることから、炉よりも新しいものであると捉えられる。つまりCピットと炉の位置関係は(1)重複、(2)一部重複、(3)近接の

	①重複	②一部重複	③近接	④その他
筒形ピット				
袋状ピット				
埋甕ピット				

第19図 Cピットの分類



第20図 Cピット位置の変遷

3種に集約することができる。また、ここでは、(4)その他として炉とは一定の距離を有することから無関係と思われるピットを想定しておきたい。なお、第17図の「D集合ピット状」は、一般的なピットとは相違するので対象外とする。それを整理したのが第19図であるが、重複型・一部重複型は炉と直接に関係するもの。近接・その他は間接的に関係するものと理解したい。よって、重複型・一部重複型は、前者と用途が相違することが考えられるのでCピットの概念からは外すべきであろう。

(2) 出現と展開

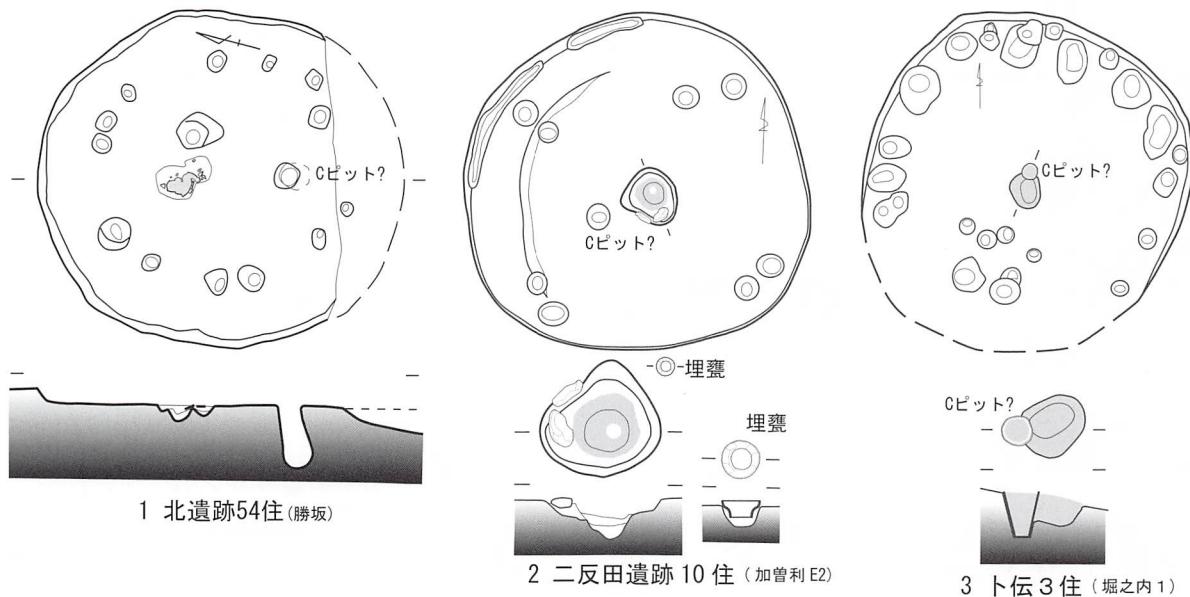
Cピットは、花積下層期に出現し、諸磯b期まで存続する。そして「武藏野台地をはじめ、大宮台地や多摩丘陵を含む西関東一帯に広がりをもっている」(川名2000)としている。展開については、以下、 笹森の論述に沿って記す。

関山I期では、炉の手前（入口から見て）の前述したような場所に位置する。形態は、通常のピットの他に袋状や埋設土器を伴うものもある。同II期には、炉の奥に存在するものも出現する。黒浜期には、炉の手前や奥に存在する。手前のCピットは、炉との関係は保ちながらも、その距離はより離れ、結果的に住居跡の中央に位置するようになる。諸磯a期は、黒浜期と同様にCピットは、住居の中央に位置する。しかし、諸磯b期以降は中央炉の設置を契機として、その位置には認められなくなる（笹森1982・1987）という。また、早坂広人は、「炉辺ピットは、（黒浜）古段階まで炉より奥に有る事例が多く見られたが、黒浜中段階以降、炉との関係に加え住居の中心という意

識が強くなったようだ」(早坂1995)と捉えた。

笹森は(諸磯期<浮島III期>では)「Cピットは住居中央から炉跡の移動に伴って、住居周辺部へと移動したのではないかと推定している。(中略)炉の移動に伴ないCピットも出入口部方向へ移動していることを意味している」(笹森1982)と考えた。そして、更に「中期における出入口部のピット、中期後半における『埋甕』に連なるものとして希望的推察をもっている」(笹森1982)とした。また、川名広文も「縄文前期の炉脇に設けられたC(中央)ピットといわれる袋状の小穴は中期の埋甕の前身やもしれない」(川名2000)としている。笹森案を勘案してCピット位置の変遷を示したのが第20図である。このようにCピットは、前期末に向けて周辺部(壁際)に移動する傾向がある。

そして、中期以降にもCピットと同様なピットが存在する(第21図)。1北遺跡54住例は、袋状のCピット?が炉側に傾いている。2の二反田遺跡10住例は、建て替えが行われた住居である。炉辺のCピット?と壁外の埋甕が存在するが、共に貯蔵穴ではないだろうか。3のト伝遺跡3住は後期例であるが、炉の切り合う型のCピット?である。

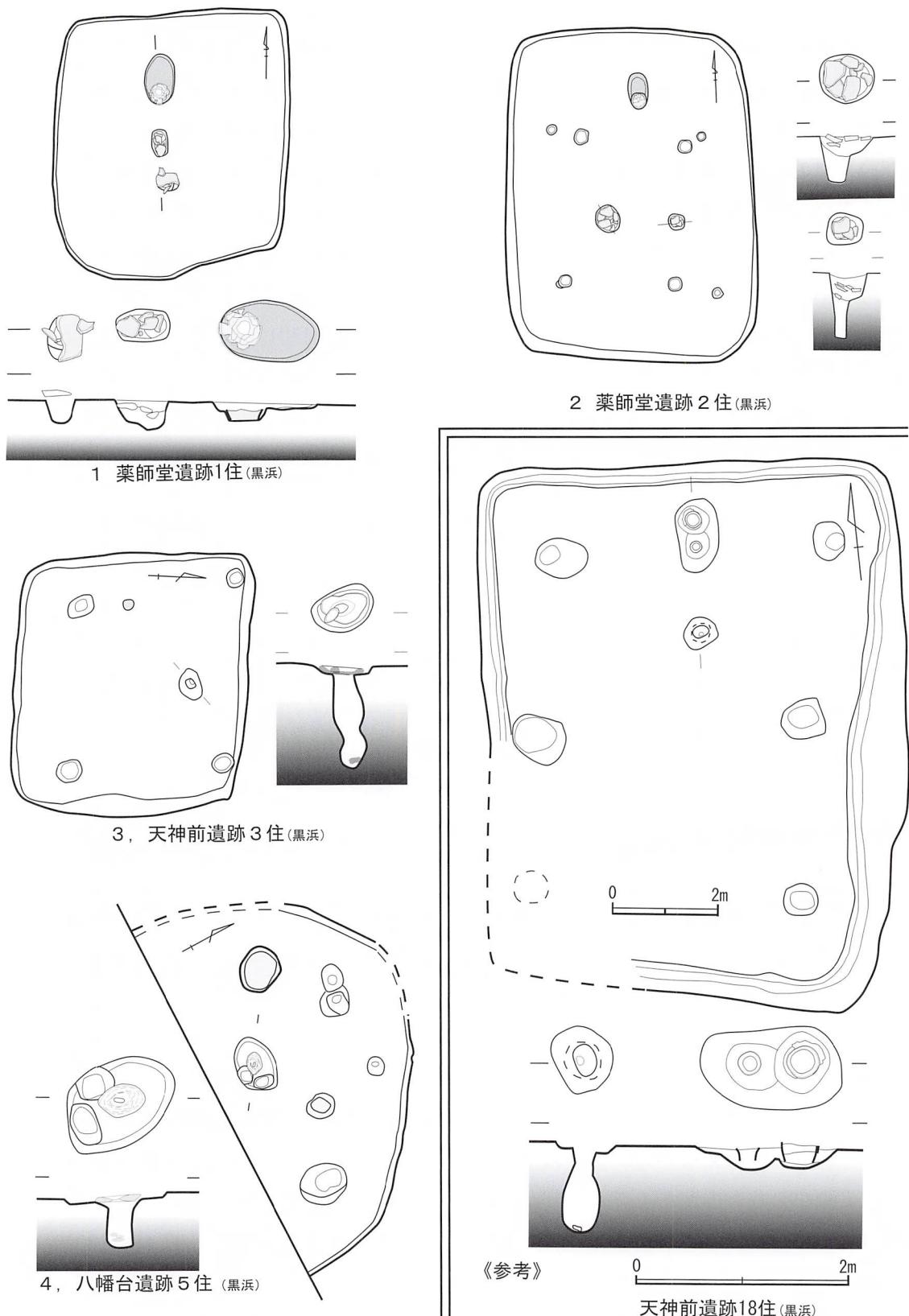


第21図 中・後期のCピット?

(3) 用途

笹森は、Cピットについて「6本主柱の住居や4本柱の住居、小円形無柱穴のタイプにも共通してあるため、柱穴とは考えない方がいいのではないか」(笹森1982)とした。その後も袋状を呈するもの、石皿で蓋をしたものがあることなどから柱穴ではないことは認識しつつもその用途については、「今なおはっきりしない」(笹森1987)としている。なお、根兵皇平は中心柱(根兵2009)、西脇対名夫は棟持柱(西脇2006)と捉えている。

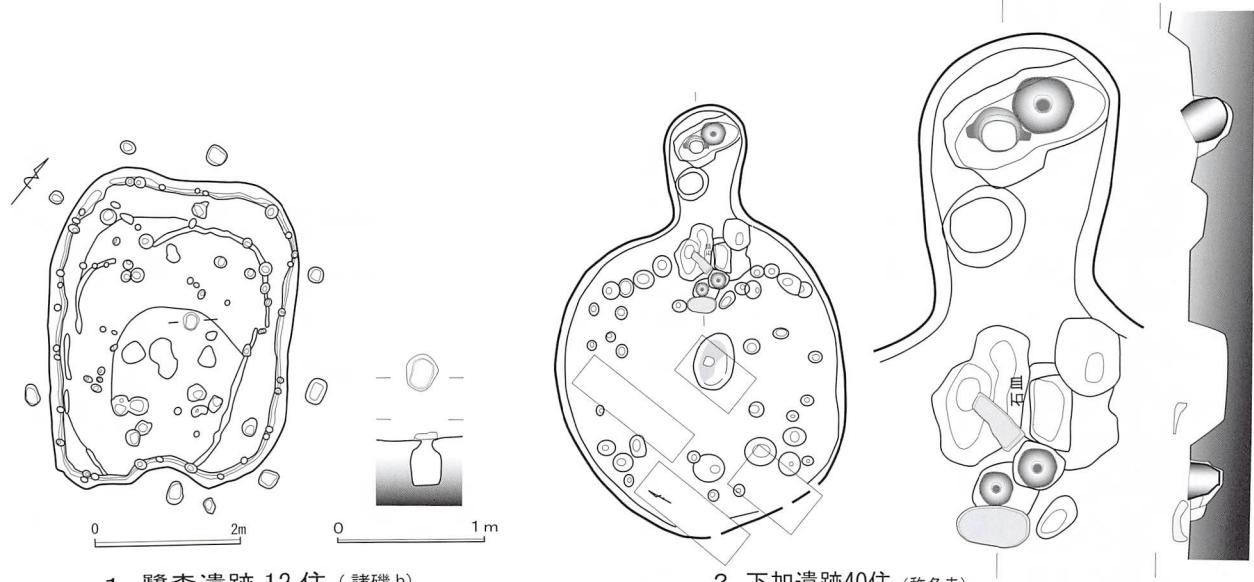
用途を考える上で気になる検出例がある。それはCピットの上に石皿を被せたものの存在である(第22・23図)。本例は、蓮田市天神前遺跡3住(田中1991)、小川町八幡台遺跡5住(黒坂1999)の黒浜期2例とふじみ野市鷺ノ森遺跡12住(笹森1987)の諸磯期の1例、下加遺跡40住(山形1992)の称明寺期の1例が管見に触れた。このうち天神前遺跡2⁽¹⁸⁾・3住例は、石皿に磨石が伴っている。更に天神前遺跡3・18住と八幡台遺跡5住の3例には、Cピット内に磨石を伴っている。また天神前遺跡22住では、石皿は存在しないがCピット内から磨石が出土している。



第22図 石皿を被せたCピット (1)

また、天神前遺跡3・18・20住と八幡台遺跡5住の4例のCピットでは、このピットの外周を一段掘り下げている。このうち3例には、石皿が設置されていた。つまり、石皿が蓋として使用されていた状況が読み取れる訳であるが、石皿が単独で蓋として機能していたのかは不明である。小鹿

野町薬師堂遺跡では、ピットを塞いだと思われる石皿などの平石が覆土上層から検出されている。恐らく、これは板材や編み物などの蓋の重石として使用していたものが落下したものであろう。屋外貯蔵穴においても礫が検出されることがあるが、これなども同様な理由であろう。石蓋は、貯蔵穴の温湿度を一定に保つ役割を果たすと共に、鼠による食害を防ぐのが目的であろう。また、Cピットの石皿と磨石の共伴は、内容物を想定させる。つまり、Cピットは堅果類・根茎類などの貯蔵穴であり、蓋として使用していた石皿はそれを製粉したような状況が存在したことを暗示している。



第23図 石皿を被せたCピット (2)

(4) まとめ

Cピットは、炉との位置関係やピットの型（筒形・袋状形・埋甕形）によって多様である（第17図）が、炉を意識しているということは共通している。しかし、全てが単一の用途とは考えられない。例えば重複型で筒形・埋甕形は蒸焼調理を意識したかも知れない。つまり、（埋甕）炉としての機能を想定したい。しかし他の型のピットは深く蒸し焼きには適さないことから、食料を対象にした保管庫的な貯蔵穴と考えておきたい。特に袋状を呈するピットの存在は、貯蔵穴としての用途を想像させる。

Cピットの所在の変遷については、関山期には炉に伴って住居跡中央に位置する。黒浜期になると炉は壁際へ移動するが、Cピットは住居跡中央に残る。しかし、やがて諸磯a・b期には壁際の炉につられてCピットも壁際に移動する。そして諸磯c期には、炉は中央に戻り、Cピットは壁際に留まる。この中央の炉と壁際のCピットとの位置関係が、中期の炉と埋甕の典型的なタイプの原型になるものと理解したい。なお 笹森は「当初、関山期において炉と密接な位置にある。その後、炉が住居の奥壁等に偏在するようになると、Cピットは床面中央に位置するようになる。（中略）その後、炉が床面中央に位置するようになり、Cピットにとって変わる」（ 笹森1981b）とした。

4 まとめ

埋甕炉・埋甕・Cピットについて、検討を加えてきた。その結果、埋甕炉は特定の時期や住居に採用されたものであることから、普遍的で必要不可欠な施設ではないことになる。それでも大形炉

体土器は究極の「枕石炉」として威力を発揮したであろう。一方、小形炉体土器は蒸焼調理に伴う対象物の特定に便利は施設である。と共に調理対象物の加温・保温のための炉台として、あるいは種火保存にも使用された施設であると考える。そして埋甕とCピットは主に食料を対象にした貯蔵穴という結論に達した。この風土で堅穴住居を住まいとする限り、地下収納は時代を超えて必須の施設であった。

以下、この問題について更に言及しておきたい。

(1) 埋甕炉の用途

人類が最初に手に入れた調理方法は、焼くことであったが、やがて蒸すという調理方法（礫群）を獲得した。炉（灰）中に食材を埋置し、その上で火を焚くというアイデアは、容易に思い着いたと考える。礫群は、大量調理を目的とした調理法であるが、これは炉（灰）中での蒸し焼きの経験なくして発案されなかった調理方法であろう。なお、本稿で言う蒸焼調理とは、灰の中に芋を埋めて焼く所謂焼き芋のような調理も含むことをお断りしておきたい。土器を手に入れた縄文人は、煮炊きを主な調理手段としたが、蒸焼調理を放棄した訳ではない。その後も炉（灰）中では、いつも蒸焼調理が行われていたのである。撲糸文期の方形掘り込み炉は、住居面積に比して相対的に大きく、規模・形態とも特異である。方形掘り込み内は、灰が充填されていたと考えられている（今村 1985）。この有囲地床炉は、多量の蒸し焼きを意識したものかも知れない。

埋甕炉は、前期（花積下層期）から後期（堀之内II期）まで存続するが、炉（灰）中の蒸焼調理を意識した施設と考えたい。後晩期には埋甕炉が消滅するが、それに連動して炉は大きく・深くなる。これは蒸焼調理を炉体土器から深い地床炉に譲ったのである。

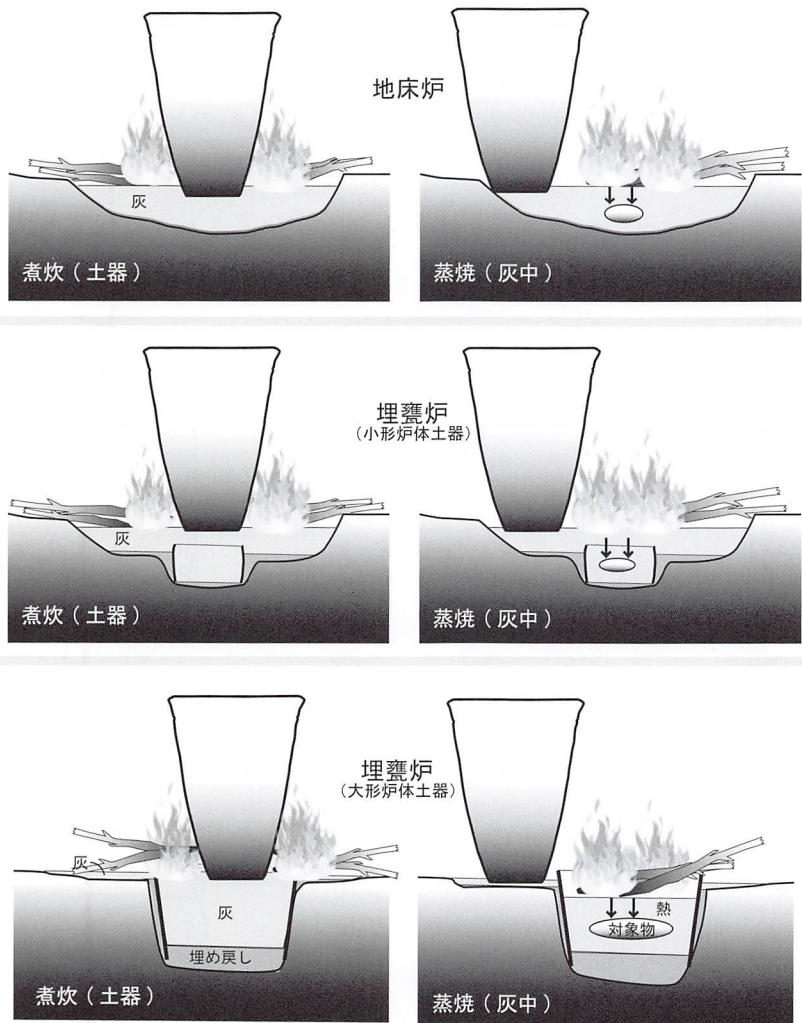
炉には、常に灰が存在する。灰は、蒸焼調理や種火の保存に不可欠の存在である。蒸焼調理の対象物や種火の保存には、これらを一定の深さに埋める必要があるからである。蒸焼調理の場合、対象物が浅過ぎれば焦げ、深過ぎれば必要以上に時間を要すると共に生蒸しの恐れが生じる。種火保存の場合、浅い位置に埋置すれば酸化が促進して灰化して消滅してしまう。一定以上の深さに埋置して、酸化の進行を抑える必要がある。上述の機能を果たす場合、炉は一定の深さが必要である。

埋甕炉、つまり炉体土器は、蒸焼調理に伴う対象物の位置特定に便利であるが……。そして種火の保存にも便利であるが何れも必須のものではない。さほど広くない炉内において対象食料や種火の探すのは容易である。敢えて炉体土器を埋設する必要はない。強いて用途を想定すれば、前述したとおり大形炉体土器は床面より突出して設置されることから、燃料の燃焼を容易にするための枕石的な役割が想定できる程度である。しかし、再三述べるとおり、炉体土器は調理にとって必須のものではなく、特定の時代のファッショニに過ぎない施設であると結論づけなければならないだろう（第24図）。

(2) Cピット・埋甕と屋内貯蔵穴

食料の確保は、最大の関心事である。そして安定した生活を維持するためには、その保存にも大きな注意が払われた。

食料保存には、その性質によって乾燥が適するもの（乾物保存）と湿度を必要とするもの（保湿保存）がある。また保存期間によても、その方法が相違する。一般的に乾物保存は屋根裏、保湿保存は地下収納（土壙）が考えられる。保存食料が集落構成員を対象としてものであれば、乾物保存は堅穴住居の天井裏や高床倉庫（掘立柱建物など）、保湿保存は屋外貯蔵穴（プラスコ形土壙など）



第24図 炉体土器の使用方法

で行われたものと思われる。乾物保存は長期に適した保存方法であり、その対象は堅果類やそれらの澱粉などの植物食料⁽¹⁹⁾ や干し肉などが考えられる。一方、保湿保存は比較的短期保存に適した保存方法であり、その対象は堅果類や根茎類などの生物（生貯蔵）^{なまもの}が考えられる。なお、貯蔵の最大の問題は鼠害であり、その対策は必須である（橋口2006）。

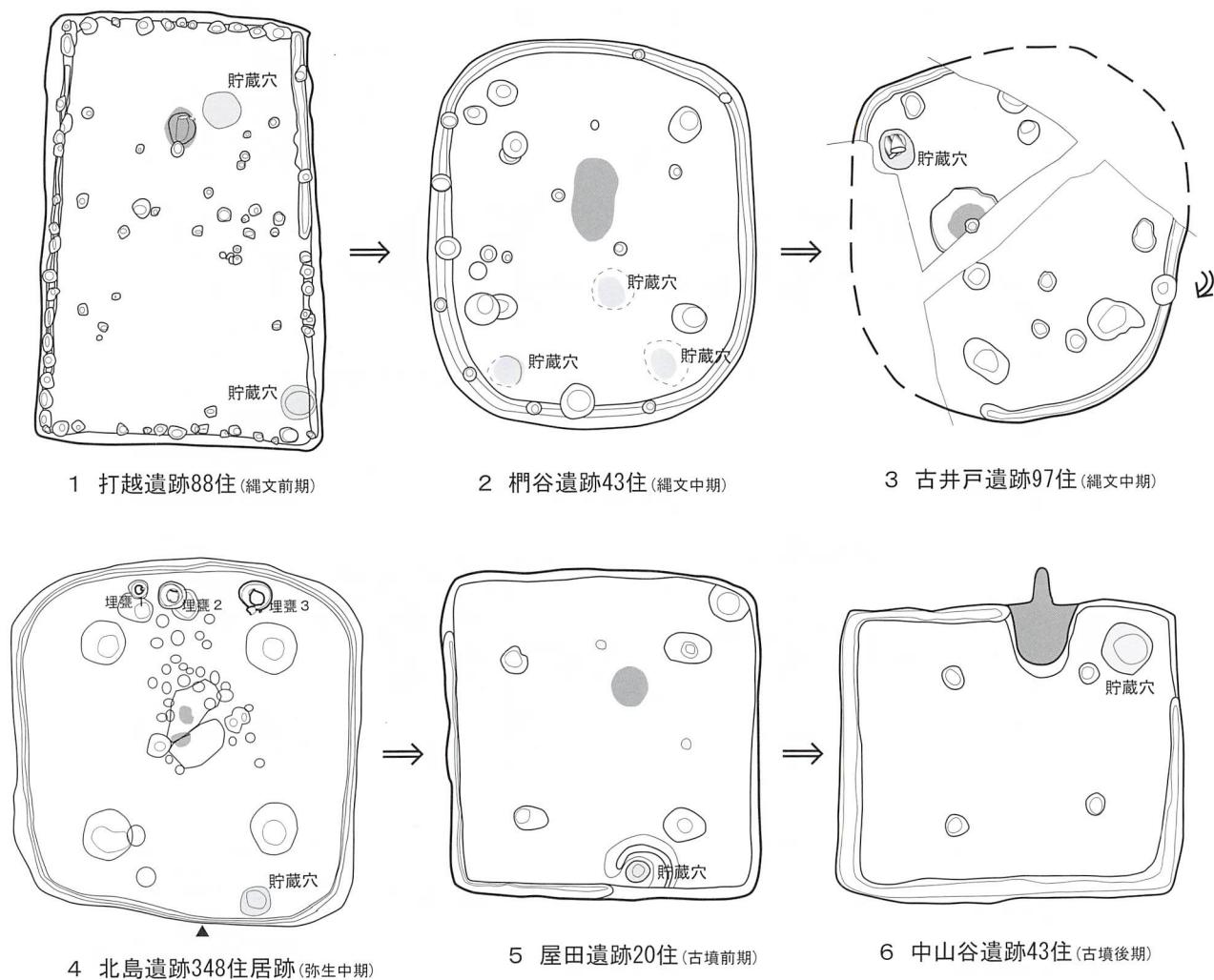
屋外貯蔵穴についてでは、その存在に疑問の余地がない。屋外貯蔵穴は集落の全構成員を対象とした施設であり、日々の消費においてその都度取り出したとは考えられない。頻繁な開閉は、安定した貯蔵穴内の環境に悪影響を与える。よって屋外貯蔵穴からは、必要な量を一括して取り出し、そして消費に供されない食料は、一時的に屋内貯蔵穴に保存・保管されたこともあったと想定しておきたい。

a 屋内貯蔵穴

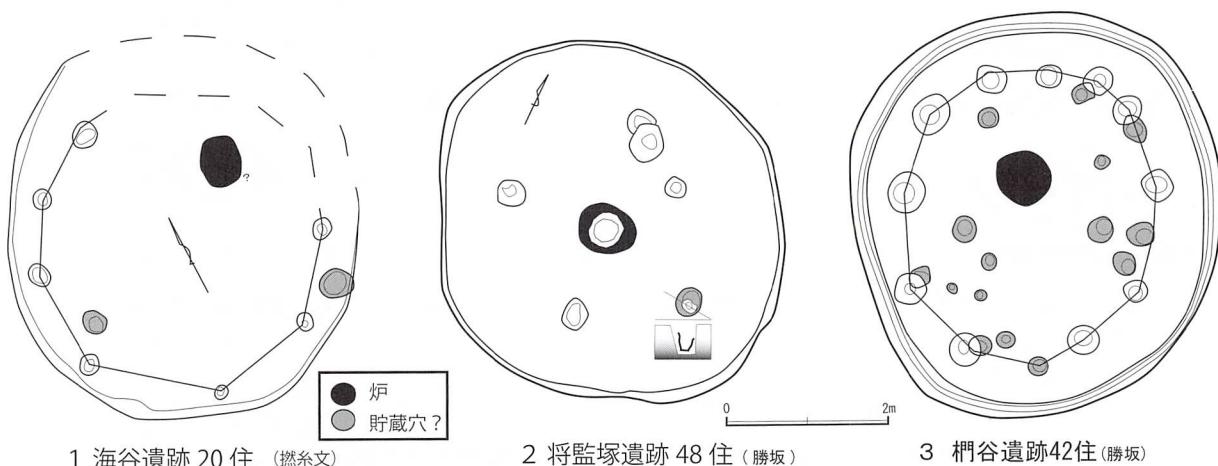
所謂「屋内貯蔵穴」は、各時代に存在する。第25図は、任意にその代表的な例を示したものである。打越遺跡88住（小出1983）では、壁際や炉に近接（第25図1）、柵谷遺跡43住（柳田2000）では袋状土壙が存在する（第25図2）。本庄市古井戸遺跡97住P4（宮井1989）があり2個体の完形土器を出土している（第25図3）。弥生時代・古墳時代前期では、炉に対する壁際に貯蔵穴が常備される傾向が強くなる。北島第348号住（吉田2003）では、入口壁際に貯蔵穴・奥壁に埋甕を配し、対象物の相違を暗示しているかのようである（第25図4）。竈の導入と共に、貯蔵穴は竈に近接し、それに

付随する施設となる(第25図6)。竈と貯蔵穴が一体化した現象は、縄文時代前期の炉とCピットが近接したのと共通の意図が読み取れる。

そして柱穴以外のピットの中にも、貯蔵穴となるものが存在するのではないかと考えた(第26図)。海谷遺跡20住例(中島2003)は、主柱穴以外のピットである(第26図1)。将監塚遺跡48住例(石塚1986)は、主柱穴と思われるピット内から土器が出土した。柱を抜き去った後でも土器を埋置する



第25図 貯蔵穴の変遷



第26図 貯蔵穴の可能性のあるピット

ことはできないので、当初よりピット内は空間として利用していたと想定したい(第26図2)。柵谷遺跡42住例(柳田2005)は、柱穴以外・間隔の狭い柱穴・柱穴に接したピットにその可能性を想定したい(第26図3)。

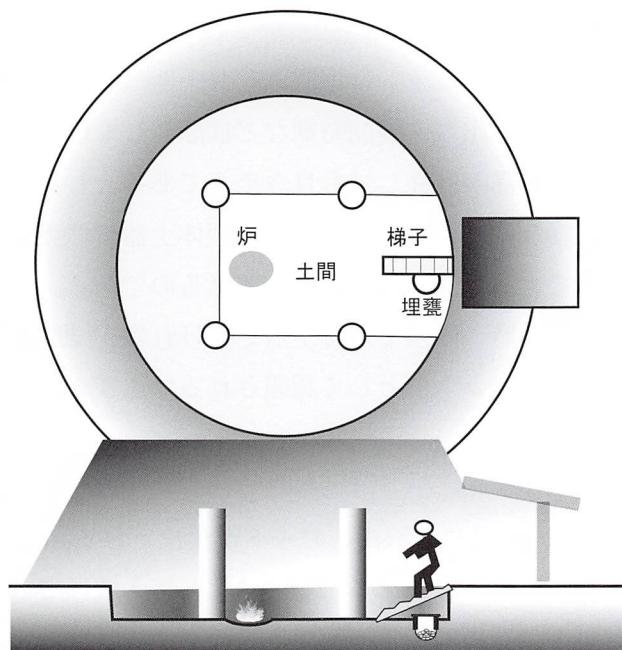
b 屋内貯蔵穴としてのCピットと埋甕

本稿では、Cピットや埋甕、さらには単なる土壙やピットも貯蔵穴となるものが存在すると考える。

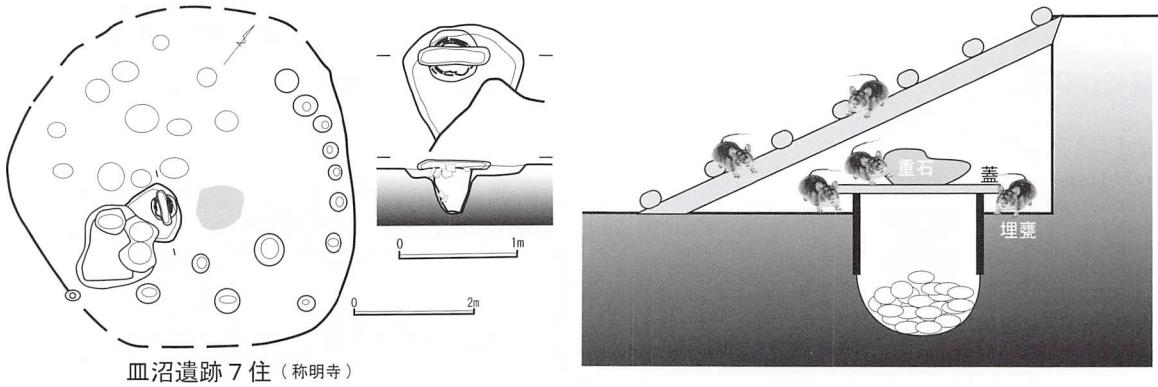
これらの屋内貯蔵穴は、屋外貯蔵穴から取り出した食料などを一時的に保存する時にも使用される施設である。地下貯蔵は、湿度・温度も一定であることから冷蔵庫・保存庫としての役割を担う。

前期では、調理との関係から炉に近接してCピットとして存在した。しかし、中期には、調理としての利便性よりも保存としての重要性が求められたために、炉熱の影響を受けない壁際に移動したのである。その場所は炉と対峙する壁際、つまり入口部付近が設定された。ここは食料の搬入に便利であること、そしてこの場所が土間でありしかも日々の生活に支障のない空間であることから選定されたのであろう。入口部は生活に支障をきたす場所のように思えるが、恐らくそれとは微妙にずれた位置に工夫して設定したのである(第27図)。実際に埋甕は、出入口と目される場所から僅かに偏在する例が多い。出入口部と貯蔵穴の一体化は、竈出現以前の堅穴住居の基本型である(第25図)。また埋甕は、炉側に傾いて設置されていることが多く、それとの関連が深いことを暗喩している。またCピットも富士見市打越3住例(小出1978)のように炉に向かって斜めに穿かれたものがあり、両者の類似性が指摘できる(第8図2・3)。

ところで貯蔵穴は、安定した一定の温湿度を求められることから蓋の存在は必須である。Cピットの周辺が一段掘りくぼめられているのは蓋の存在を予想させるし、実際に石皿で蓋をしている例があることは前述したとおりである。全てでは無いにしろ基本的に埋甕(貯蔵穴)には、用途に応じた多様な蓋は存在していたのであろう。把手を持つ土器や波状口縁などが埋甕に供されないのは、その傍証になろうか。



第27図 埋甕と出入口



第28図 埋甕と鼠

なお、全ての住居に埋甕は存在しないが、それは貯蔵穴が存在しないことを意味しない。単なる貯蔵穴であれば素堀のピットで充分に対応できるのである。埋甕は廃物利用であり、設置時に土器が入手できなければ単なるピットとして存在するしかない。貯蔵穴に土器を用いて埋甕とするのは、素堀のピットよりクオリティーが高いからである。それは壁崩落の防止も意図されたであろうが、最大の理由は鼠侵入の阻止である(第28図)。恐らく素堀のピットであれば、床面を掘削して侵入が可能となってしまうであろう⁽²⁰⁾。白岡町皿沼遺跡(青木1983)は、埋甕上に棒状礫が渡されており、蓋の重しに利用された様子が想像される。

貯蔵穴は必須ではなく、「あれば便利」な施設なのである。しかし弥生時代以降、屋内貯蔵穴は常設される傾向にある。貯蔵穴は囲炉裏住居では入り口部壁際、竈住居では奥壁の竈脇に存在する。屋内貯蔵穴は、不可欠ではないが必要な施設なのである。

埋甕内に充满している土は、埋没の過程で生じたもので故意に土を入れたような状況は観察できない。つまり、空洞として機能しているのである。石器などの埋納例が希有であることを考えれば、やはり主に食料の貯蔵施設と考えることが素直な説ではないだろうか。

また、Cピットについても袋状を呈するものがあることから貯蔵穴の可能性が高いことは前述した。このCピットが中期の埋甕に移行したとすれば、これもまた貯蔵穴ということになろう。

(3) 炉体土器と埋甕は、廃物利用そのもの

炉に埋置された土器(炉体土器)とピットに埋置された土器(埋甕)の相違点は、その場所が異なるだけであり、土器の使用状態、出現・展開時期などは酷似している。炉体土器や埋甕が不可欠なものであるならば、専用の土製品が存在しても良さそうである。しかし、炉体土器や埋甕は全て転用品であり、廃物利用の産物なのである⁽²¹⁾。しかし、炉体土器や埋甕においても完形品ないしそれに近い土器が供給できるのであれば、それを使用しているのである。

つまり、炉にもピットにもその時、転用できる土器が無ければ、「埋甕炉」も「埋甕」も存在する事はなく、単なる「地床炉」や「ピット」として認識されるに過ぎないのである。

あとがき

竪穴住居跡を調査すると、柱穴以外にも沢山のピットが検出される。「この穴は何に使ったのですか」という質問を受けることが多い。「わかりません」と答え続けていたら、もう定年を迎えようとしている。何と無力な調査員なのであろうか。自戒の念が強い。土層を観察することは重要であるが、色も分層もまあどうでも良い。見極めなければならないのは、自然堆積か人為堆積かとい

う事である。前者ならば、その遺構は空いたまま使われたのであり、後者ならば埋めるために掘られたと言う事になる。しかし空いたまま使われた穴も、その役割が終了すれば埋め戻される。一概に堆積の違いで用途を想定することはできないが、それでもこの判断は最低限しなければならない。できうるならば、全ての穴を断ち割って土層を観察したい。

本稿を草するにあたり近江哲・金子直行・川嶋新平・栗島義明・黒坂禎二・笹森健一・末木啓介・鈴木徳雄・利根川章彦・中島宏の各氏には、多大のご教示を賜りました。厚くお礼申し上げます。

《註》

- (1) 大形炉体土器と小形炉体土器は、大きさ以外にも相違する特徴がある。それは炉体土器が埋置される深さである。前者は口縁部が床面より突出するのに対し、後者は床面より低い位置に設置される。つまり、大形炉体土器は区画、小形炉体土器は通常の炉機能を更に高めた施設として機能していたものと考えられる。
炉体土器は、口縁部の存在する筒抜けの土器を正立した状態で使用しているものが多い。しかし胴部や底部、あるいは倒立しているものもあることから使用部位は何でも良かったのである。
- (2) 大形炉体土器が床面より突出する事や石囲炉など存在するのは、薪材などを地面から浮かせる工夫である。それによって、酸素の供給を容易にし燃焼を効率的に行うことができる。所謂枕石炉は縄文時代早期より竈出現以前の住居跡に普遍的に見られるが、これも同様な意図で採用された炉型式であろう。
- (3) 炉体土器は、その内部に灰が充填されて使用されていた。しかし裏慈恩寺東遺跡1住（並木1978）では、土器囲埋甕炉の内側上位に別個体の土器片が貼り付けられるような状態で出土していることから、この土器片が落ちない部位まで埋められていたことがわかる。
- (4) 石囲炉は、明瞭に炉区画を意識したものであろう。なお、多重炉体土器（入れ子状炉体土器）や石囲密着型埋甕炉は、区画した土器を保護及び補強するための工夫である。
- (5) さいたま市下加遺跡（山形1992）例では、深さ40cmを計る大形炉体土器があるが、この中では酸素不足となり火を焚くことはできないであろう。前述のとおり、煮炊き時では、炉体土器内は灰が充填していたのである。
- (6) 小形炉体土器使用炉の場合、炉体土器の外側に焼土が認められる。これを炉体土器の外で焼成したためと三上氏は捉えている。しかし多くの報告書を見ると、この焼土は炉体土器を埋設する際に埋め戻されたように見える。
- (7) 三上徹也は「土器内部に焼土のない点は、ここに火種を入れた可能性を否定する」（三上1995）としたが、灰中に種火を保存する程度では焼土は生成されないだろう。
なお小林達雄は、屋内炉は火種を絶やさないためのものであり、日常の煮炊きは屋外で行うとしている（小林2007）。小林達雄は、その理由の一つにイヌイットの例を挙げている。環境の異なる人々の生活を参考にすることに意味があるのだろうか。賛同できない。
- (8) 蒸焼きとは、蒸気による調理を連想させ適當な名称ではないかも知れない。しかし、食材自身の水分を利用した調理であるので、灰中にくべて焼き芋をつくる調理も含めて敢えて「蒸焼調理」の名称を用いる事にする。
- (9) つまり、炉体土器は「入れ物」としての機能を果たしていたことになる。花積下層期や関山期などの初期の炉体土器のなかには、比較的完形品に近い土器を使用している。これは、容器としての役割が意識されているものと思われる。例えば、宮ヶ谷塔遺跡第1号住居跡（山形1982）が相当する。勿論、中期でも比較的完形に近いものを使用する例は存在する。ところで埋甕は、当初貯蔵説が有力であった。埋甕と類似する炉体土器にも容器としての用途を想定したい。
- (10) 埋甕が食料貯蔵説から骨壺・胎衣壺説に移行した'70年代に、「屋外貯蔵穴」は、逆に墓壙説が否定され食料貯蔵説が定説化した。願わくば、埋甕も同様な経緯を辿って欲しかった。
- (11) 定説化している胎盤収納説を主張していた桐原健も後に「思惟的な性格をもつ施設」として、具体的な用途を想定できずにいる（桐原1983）。
- (12) 埋甕が住居を放棄した後も手つかずの状態で撤去されないのは、埋甕そのものが再利用品であり、敢えてそ

れを再利用する必然性が無かつただけである。

- (13) 入口に存在する埋甕は、踏まれることによってより強く再生されることを願ったものだと言われている。しかし、入口部と想定される場所から左右にずれた位置に存在する例も多く、また床面より突出して埋置されており、踏みつけられる状態はない。
- (14) 埋甕の「正立・倒立」の差違に特別の意味を付与する考えがあるが、本稿では共に貯蔵穴と考える。倒立埋甕は、袋状土壙と同様に貯蔵量が増やせるほか、入口が小さいために内部の環境を一定に保ち易いメリットがある。なお、炉体土器でも将監塚遺跡J7住（石塚1976）では倒立して使用しており、「正立・倒立」に用途の違いはないものと考えたい。
- (15) 屋外の単独埋甕についても貯蔵施設と考えている。なお、主に東関東に多く存在する屋外のフラスコ状の大形貯蔵穴について注目すべき見解がある。関東地方西部では堅果類、東部では根茎類に対する依存度が高い。よって西部では貯蔵穴が少なく・打製石斧が多いのに対し、東部では貯蔵穴が多く・打製石斧は少ないと捉えた。そして、集石土坑を根茎類の調理施設である可能性を指摘した。
- (16) 笹森氏は、該期住居跡の上屋を復元・検討する過程において、「A」・「B」の記号を軸線として使用した。次いで特異な方をするピットに「C」を冠して「Cピット」と命名したものと思っていた。しかし、氏によるとこの「C」は、Centerの「C」であるという。なお、Cピットについては、前期の遺構という暗黙の了解がある。
- (17) 第18図②は「一部重なる」ものであるが、③のように「炉を切っている」と区別できない。
- (18) 天神前遺跡2住Cピット5は、埋甕を有するようであるが、同じく炉体土器を有する炉跡4に重複して存在しているために、埋甕を有するCピットなのか炉体土器なのか判断に苦慮する。なお、炉跡4には、炉体土器上に石皿と磨石が検出されている。
- (19) 栗島義明によれば、「トチの保存は煙で燻される屋根裏が最適であったそうで、数年どころか10年以上も前に収穫されたトチが保存されている例も珍しくなく、また「たとえばトチは外皮がむかれた状態、あるいはアグ抜きがされた粉の状態等々で貯蔵されていた可能性」も指摘している（栗島2010）。
- (20) 鼠が貯蔵穴に侵入し食料が食い荒らされることは何とも避けたい。しかし、オーバーハングした袋状ピットや這い上がる事が困難な埋甕ピットに鼠が落ち、脱出不可能な状態が起きたとしたら、これは縄文人にとっては貴重なプレゼントとなったのであろうか。
- (21) 故意に破壊した可能性もあるが、ここではそれは問わないことにする。なお、昼間孝次氏も埋甕炉の炉体土器について「廃物利用をはかった」（昼間1984）と指摘した。

《参考文献》

- あ 青木美代子 1983 『皿沼遺跡発掘調査報告書』白岡町文化財調査報告第1集 白岡町教育委員会
荒井 幹夫 1978 『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会
荒井 幹夫 1983 『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会
飯島 吉晴 1985 「家と火—カマド・イロリと火—」『歴史公論10 119』雄山閣
石塚 和則 1986 『将監塚—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井之口章次 1970 「胞衣の始末」『西郊民俗』第五十四号 西郊民俗談話会
猪越 公子 1973 「縄文時代住居址埋甕について」『下総考古学』5 下総考古学会
今村 啓爾 1985 「縄文早期に竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代第80号』早稲田大学考古学会
大場 磐雄 1955 「主要縄文式竪穴の考察」『平出』朝日新聞社
か 柿沼 幹夫 1977 『前畠・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 埼玉県教育委員会
金井 安子 1997 「縄文人の住まい—炉の処理をめぐって—」『青山考古』第14号 青山考古学会
金子 直行 1986 『北・八幡谷・相野谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
金子 直行 1990 『八木上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第91集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 金子 直行 2001 『まま上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子 直行 2005 『長瀬町中山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第313集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子 義樹 1984 「縄文時代における埋甕についての一試論—事例分析を中心に—」『神奈川考古』第19号 神奈川考古同人会
- 神村 透 1974 「埋甕と伏甕 一そのちがい—」『長野県考古学会誌19・20』長野県考古学会
- 川名 広文 2000 『上福岡市史 通史編上巻』上福岡市
- 木下 忠 1970 「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル42』ニューサイエンス社
- 木下 忠 1973 「埋甕といわゆる貯蔵穴について」『信濃25-8』信濃史学会
- 木下 忠 1981 『埋甕 一古代の出産習俗—』雄山閣
- 桐原 健 1965 「住居内における火使用の問題」『井戸尻』
- 桐原 健 1967 「縄文時代中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』18-3
- 桐原 健 1983 「埋甕」『縄文文化の研究』第9巻
- 桐原 健 1988 『縄文のムラと習俗』雄山閣
- 栗島 義明 1999 「第三章 叙文時代の遺跡」『小川町史 資料編1 考古』小川町
- 栗島 義明 2010 「第2章 森の資源とその利用」『考古学の挑戦』岩波ジュニア新書 岩波書店
- 栗原 文蔵 1973 『岩の上・雉子山』埼玉県遺跡発掘調査報告第1集 埼玉県教育委員会
- 黒坂 稔二 1984 『深作東部遺跡群』大宮市遺跡調査会報告第10集 大宮市遺跡調査会
- 黒坂 稔二 1992 『薬師堂遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第117集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂 稔二 1995 『向山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂 稔二 1999 『小川町の歴史』資料編1 考古 小川町
- 黒坂 稔二 2005 『宮西遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第310集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小出 輝雄 1978 『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集 富士見市教育委員会
- 小出 輝雄 1983 『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集 富士見市教育委員会
- 小金澤保雄 2006 『大鹿窪遺跡 窪B遺跡』芝川町教育委員会
- 小林 達雄 2000 『縄文人追跡』日本経済新聞社
- 小林 達雄 2007 「2 縄文時代の住まい」『住まいの考古学』学生社
- さ 佐々木藤雄 1975 「埋甕論ノート」『異貌』三 共同体研究会
- 佐々木藤雄 1998 「北の文明・南の文明(上)ー虚構の中の縄文時代集落論ー」『異貌』拾六 共同体研究会
- 笹森 健一 1977 『前畠・島之上・出口・芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 埼玉県教育委員会
- 笹森 健一 1976 『志久遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書第31集 埼玉県遺跡調査会
- 笹森 健一 1981 a 「縄文時代前期の住居と集落(I)」『土曜考古』第3号 土曜考古研究会
- 笹森 健一 1981 b 「縄文時代前期の住居と集落(II)」『土曜考古』第4号 土曜考古研究会
- 笹森 健一 1982 「縄文時代前期の住居と集落(III)」『土曜考古』第5号 土曜考古研究会
- 笹森 健一 1987 『鷺森遺跡の調査』郷土資料第33集 上福岡教育委員会
- 笹森 健一 2007 「4 古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡」『住まいの考古学』学生社
- 佐原 真 1972 「1971年の考古学会の動向—弥生時代—」『考古学ジャーナルNo74』ニューサイエンス社
- 佐藤 洋 1976 「縄文時代の埋甕習俗」『物質文化』第27号 物質文化研究会
- 佐藤 攻 1971 「茅野和田遺跡東地区の埋甕」『長野県学会誌』11 長野県考古学会
- た 高林 重水 1971 「高河原遺跡発見埋甕のカッティング所見」『長野県学会誌』11 長野県考古学会
- 田中 和之 1991 『天神前遺跡』埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集 埼玉県蓮田市教育委員会
- 田中 信 1982 「埋甕形態論」『土曜考古』第六号 土曜考古学研究会
- 塚本 師也 2007 「乾燥型貯蔵穴」『なりわい』縄文時代の考古学5 同成社
- な 中島岐視生 2003 『第二椿峰遺跡群』所沢市教育委員会

- 並木 隆 1978 『裏慈恩寺東遺跡試掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第33集 埼玉県遺跡調査会
- 西脇対名夫 2006 「炉のない住居」『ムラと地域の考古学』同成社
- 根兵 皇平 2009 「縄文時代前期後葉の縦穴住居跡—諸磯式土器分布圏における一類型—」『遡航』第27号
早稲田大学外学院
- 野代 恵子 2008 「鰍沢河岸跡の胞衣壺」研究紀要24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 野中 和夫 1998 「撫糸文期の竪穴住居の特性と集落に関する一考察」『群馬考古学手帳8』群馬土器観会
- 野村 智 1992 a 『坂東山遺跡 第1・2次』入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第11集 入間市遺跡調査会
- は 橋口 尚武 2006 『食の民俗考古学』ものが語る歴史11 同成者
- 早坂 広人 1995 『水子貝塚』富士見市文化財報告第46集 富士見市教育委員会
- 早坂 広人 1999 『勝瀬遺跡群』富士見市遺跡調査会報告第52集 富士見市遺跡調査会
- 原田 昌幸 1983 「撫糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』第7号 土曜考古学会
- 原田 昌幸 1984 「続・撫糸文期の竪穴住居跡」『土曜考古』第8号 土曜考古学会
- 原田 昌幸 1999 「縄文的文化の中ではぐくまれ終焉とともに消滅した『第二の道具』」「『縄文学の世界』朝日新聞社
- 昼間 孝次 1984 『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
- ま 三上 徹也 1993 「縄文時代の共同体」『駿台史学』88 駿台史学会
- 三上 徹也 1995 「土器利用炉の分類とその意義—縄文時代における吊す文化と据える文化—」『研究紀要』第1号 長野県立歴史館
- 三上 徹也 1999 「縄文人の実用と嗜好—土器利用炉にみる分布論的考察—」考古学研究第45巻第4号 考古学研究会
- 三上 徹也 2006 「吊す文化と据える文化—縄文時代における土器利用炉の分類とその意義—」『縄文「ムラ」の考古学』雄山閣
- 宮井 英一 1989 『古井戸—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮坂 光昭 1965 「縄文中期勝坂と加曾利E期の差」『古代』44号
- 村田 章人 1997 『原/谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- や 柳田 博之 2000 『門谷遺跡・南方遺跡・南方上台遺跡・行谷遺跡』浦和市遺跡調査会報告第274集 浦和市遺跡調査会
- 柳田 博之 2005 『門谷遺跡・南方遺跡』さいたま市遺跡調査会報告第37集 さいたま市遺跡調査会
- 柳戸 信吾 1999 『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能日高ゴルフコース地内埋蔵文化財調査報告書 飯能市遺跡調査会
- 山形洋一他 1982 『宮ヶ谷戸第5貝塚』大宮市遺跡調査会報告第5集 大宮市遺跡調査会
- 山形 洋一 1992 『下加遺跡』大宮市遺跡調査会報告第35集 大宮市遺跡調査会
- 吉田 稔 2003 『北島VI』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 横田 光男 1984 『上野ヶ谷戸遺跡』日高町埋蔵文化財調査報告書第六集 日高町上野ヶ谷戸遺跡調査会
- わ 渡辺 新 1991 『縄文時代集落の人口構造』千葉県権現原貝塚の研究 I
- 渡辺 一 2009 『今宿東遺跡群III』鳩山町埋蔵文化財調査報告第34集 鳩山町教育委員会
- 渡辺 誠 1970 「縄文時代における埋甕習俗」『考古学ジャーナル40』ニューサイエンス社